



機械人間 あたたかい

血の通った身体をもって

いるくせに 無表情に歩

きつづける人々 規則正

しく きめられた通りに

歩きつづける人々

ほんとうに大切なもの

って 何なの？

# 目次

## ▼巻頭言▲

### I 大手前を語ろう 1

### II 今、自治会に必要なことは 5

#### ▼それぞれの角度から

一人の生徒として

師走に想う

片岡茂季  
尾上誠人

自治会活動への誘い<sup>いざな</sup>

池町俊彦

#### ▼インタビューーあの一ちよっとおたずねしますが

### III 平和への主張 11

平和と国民

でいすかつしょんーもし愛がなければー

山本勝久

軍靴の音高まりゆく日々<sup>ひび</sup>に寄せて  
“平和の砦”を守れ!

小菅陽子  
寺西章江

#### ◇詩 疑問

### IV 顔 17

FORCE—FACE—PEACE

西野和義

波と嵐と

高堂透

### V 大手前いろいろー僕らが感じた大手前ー 21

廊下・うぐいす張り

授業風景

友人について

H<sub>2</sub>O<sup>+</sup>オキシニウムイオン

河野綾子

笑喜太嬉

運動場のことなど

行事について

あくまでも個人的に

林伸浩  
竹内尚寿  
倭建

### VI 体験記 25

#### ▼クラス

クラスの中の僕

Pythagoras III

一人の自分

DUSTCHUTE

▼クラフ  
M君の教室

ミスター「ちゃめつけ

柔の道（柔道）  
私の「一枚の絵」（美術）  
放課後下校クラフ

苦しみそして喜び（水泳）  
理研体験談！（理化学研究）

VII  
し  
いわく 35

昔の私と今の私  
学問の精神を養うということ

山田郁生校長先生  
多賀谷疆先生

読書とは

「白鯨」余聞タマス・ニッカソンの日記から

松井慶子先生  
浜田一郎先生

VIII  
僕らの主張 41

時間と人間「いま」という時の流れで  
一応高校生（未熟者めえ〜っ！）  
「今の若い者は……」

原 京子  
剽軽竜子  
喜田貴美枝

結婚と人生  
音楽と社会  
—音楽にできることはいったい何なんだ—

若井敦子  
岡本正樹

IX  
文 芸 —14 PIECES・からっと— 48

旅  
月光  
響舞（ひびきにはうむる）  
時は流れて  
Reverie  
風景I  
アメリカ紀行

中森悦子  
ビクリン酸  
石戸加谷子  
ノエル  
浅野 晃  
中瀬祐美  
上田利香

流れのなかに  
ある日にねこがしゃべったこと  
僕の高校三年間  
虚 無  
寂湖抄  
—MIRAI—  
短歌・俳句

稲葉宏幸  
おたま  
武永伸一  
若原久美  
染森由紀子  
華 栄 湖  
虚 無 為

▼上田達也 & EDITORS 65

表紙\*三年四組 平山 博

# I 大手前を語ろう

——笑いとどめめの中——



日時：81・12・16 場所：第二面談室

出席者：2年・榎本了子 稲葉宏幸 高堂透 池町俊彦

福島充子 真鍋玲子 3年・石崎芳秀

司会：2年・中瀬祐美

## ☆大手前は田舎か都会か?!

中瀬 新一年生への学校紹介として、従来のスプリングのような学校紹介はやめよう、ということ、こんな雑談会形式で、自由にしゃべってもらおう、という企画ですので、お茶やら、お菓子でも飲みながら、気楽にしゃべって下さい。

それじゃ初めに、大手前の第一印象から行きましょうか。

私はねえ、校舎がむちゃむちゃ占いなあっていうことが印象に残って、他はあんまりなかったけど……

高堂 もっととまじめなかなか思ってた。学生靴もって、腕振ってすたすた歩いてるみたい……でも意外とユニークな人もいたりして、でも他の学校と比べたらまじめかな。

真鍋 運動場がねえ、中学よりは広いけど狭いなあと思って、大阪城に面してて、田舎やなあと思いました。

榎本 ……えっとねえ、まずまじめ、というかみんな偉いなあ、と思って、さっき真鍋さん田舎やうって言うたけど、私は都会やな

あと思いましたねえ。

稲葉 僕は、入ったときはまじめやと思いましたね。外からは……しばらくしてると実体が見えてくるんですね。で、一年の最初、勉強についていけないって悩む人もいるって聞きました……僕は現状に流される方ですから……。(笑)

池町 最初入ってきたときには、大阪城の桜がきれいでしたね、通ってうれしかったんで、一生懸命勉強せな、と思ってました。

中瀬 そんなに思いました？嬉しかったねえ、あの時は……後の事も考えんと(笑)

稲葉 思いきり遊ぼうと思って……

高堂 安心したなあ。

中瀬 や、それで浮々して、発表があって昼からまた来る時、電車降りたら、大手前の親子連れがいて、お母さんが、「あんた、大手前通ってんからこれからもっと勉強せなあかんよ」(笑)子どもが凄く深刻な顔で「……うん」って。(爆笑)

池町 親子で壮絶やな。

高堂 おると思うよ、ようさん。

中瀬 ガリ勉強ないけど、よう勉強する人多いですね……。

## ☆ホコリとデントウ

中瀬 校舎のこと行きましょうか。私、去年別館の二階の端で、あそこ蚊がわくんです(笑)大阪城も見えへんし、府庁の窓しか見えへんです。それで、たまに抜けていく人がいたりして……石崎 造りですか……おかしい造りで、昔集会委員したんですけど、複雑な校舎で、あちこちから抜けて行くんです。特に、前の体

今、自分が思うこと、感じることを、言いたいこといろんな人からいろんなメッセージ

育館の裏、一人で受けもって、草ぼうぼうで、あっちから三人と走ったら、もう足傷だらけで、今度こっちとか繰返してたら足ぼろぼろになりました(笑)靴下も一足ためになりました(笑)

中瀬 じゃ、人が抜けるのを止める立場で、御本人は抜けたことは？

石崎 三年のとき一度だけ……(爆笑)

池町 それと、テニスコートが消えて残念でしたね、あの辺、きれいやったのに……。

高堂 さっき別館言うてたけど、僕、新館でね、工事中で。それと、トイレが困ってね、理科棟まで行かんといんです(笑)不思議なもので、遠いと思いたいんです。それで、トイレの中心でしょ、入って周り見回したら、うちの組ばかりで(笑)

中瀬 少ないですねえ、学校中で三ヶ所でしょ。混む時間帯もあるし、少なさについては是非載せたいんですが、どうですか。

福島 一つの所にたくさんあるから、行くのがめんどいだけで……でも、授業を延長されると、ちょっとねえ。

中瀬 苦しいですね!!もう慣れましたけど、それでも検尿の時はあせりますね(笑)設備の話やめましょ、はじめになる(笑)

高堂 設備やったら負けへんよ、緊張りの廊下とか……大阪城なみやで(笑)

稲葉 いや、あそこ近代化してるよ(笑)エレベーターとか。

高堂 ここも五階建てやったらエレベーターついたのになあ(?!)

稲葉 でも、もうすぐ全面改築でしょ。

中瀬 ええ!!うそお……そうか、残念やなあ……この学校のいいところって、古色ソー然したとこやのにねえ……。

池町 人から聞きましたけど、大手前はホコリとデントウだけやって。

## ☆トッポはラーメン?! 追う、定食

中瀬 昔、食堂が狭かったときは府庁に行ったとか聞きましたけど、実は食堂の話がしたくて、これ企画したんですかねえ……。

私はカツ丼にひかれて、友達は文化祭に来て、わかめラーメン食べて、それで大手前に来たんですけど、皆どうですか？

池町 僕はやっぱりわかめラーメンですね。

石崎 とんかつのことですけど、あれ、豚肉みたいな顔してるでしょ。でも、ハムとちがうんですか？こないだ食べたとき、そんな感じでしたんですけど……。

一同 ええ!!(しばしざわめく)

中瀬 最近、定食に凝ってまして……でも以前は、カツ丼は御飯が見えへん位カツが入ってて、最近ちょっとすき間があって……。それで私、前は食券買ってたんですよ。

池町 そんなにあるの？そっちの方が衛生的やなあ……(同納得)

中瀬 それと、お札持って行って120円のもの買っても、文句言いはりませんね。あれ、ありがたいですね。

## ☆入った頃は……

中瀬 学校生活について、行事なんかどうですか。

池町 二年になると、クラブでも中心になるんで、やってるやつは……

という風になりますねえ、それと、つまりすぎて、わけわからんうちにやってるような所がありますねえ。

高堂 テストとセットやねんね(笑)すぐ前とか後とか……。

中瀬 いくつあるの……まず遠足、バレーボール大会……。

榎本 平常考査!!それからコーラス大会があったね。

ここあ のみたい……おこのみ焼食べたい……今すぐ(Y・N)

高堂 中間考査の後連続してバレー・コーラス・文化祭があつて……

中瀬 文化祭あけに英数の平常かな。忙しいね。

池町 ゴールデンウィークのあとにあるんですよ!! (爆笑)

榎本 忙しかったけど、すごく嬉しかった。勉強ばかりで行事  
ないって聞いてたけど、色々あつて嬉しかった。成績の方だめ  
やつたけどね (笑)

池町 一生懸命勉強する人ばかりで、個人主義者みたいな感じは  
あつたけど、入つてみたらいい人ばかりで……

稲葉 入つた頃は、皆ぶりっ子してるでしょ、春のうちは……

中瀬 勉強の話でませんねえ、ちよつとしてみましょうか。先生ね、  
変わった人多いですねえ。個性豊かというか……ねえ。

池町 授業に関しては、予習復習すること、わ、  
先生みたいや、やつぱり、ある面余裕をもつ  
て生活送れますよ (笑)

高堂 せえへんからたまらんやな。英語の平常と  
か (笑)

中瀬 平常考査ない学校もあるんですね。

池町 あれは、先生の好意でやつて下さるから……

高堂 あれなかったら困るかな、やつぱり。

中瀬 あつても困りますけど (爆笑)

池町 人からの伝言ですけど、体育のレベルが低いから (笑)、一  
つでもたけてる人はヒーローで、安心していいって (笑) それ  
で休みの宿題、春なんか多かったねえ、まだ残ってるわ (笑)  
榎本 しんどいけど、とてもいい学校やと思う。行事は一生懸命  
やるし、友達もいい人やし、ほんといい学校や思います。



池町 高校野球でね、野球だけの三年間とか言うたら、青春や、と  
か尊敬されるでしょ。勉強でもそれに匹敵する思うんですけど

ね。雰囲気はともいいたいですね。協力的やし……

中瀬 クラブも盛んやし……行事は生徒にかなり任されてるでしょ。  
榎本 その分責任あるけど。

### ☆自治会長は芸人になれ!!

中瀬 でも、任されてるから、その分凄く慎重になるでしょ、特に  
自治会なんかは……。こないだスプリングでインタビューしたら、  
本部は暗い、とか、何か隔離された所、っていう感じだね……

池町 僕は、何というか、肩肘はらないとか、「今何やってんの?」  
と聞かれたら、説明できる自治会にしようということやってた  
んですけどね。あ、これ一年向けでしたわ。 (笑)

高堂 じゃ、頑張つて参加してほしい、とか?

中瀬 内部やってた者は庇つてしまうけど、外部からはどうやる?

榎本 じゃ外部から。内部の人は一生懸命やってくれてるけど、外  
部が関心が薄い、と言うか、ね。中学の時に、立候補して、リ  
ンカーンみたいな「生徒の、生徒による……」って 自治会は皆  
の声を集めて実行に移す機関にすぎない、って言うた人がいて  
ああ、本当やな、と思つたんですけど。

中瀬 うーん、でも、「別に自治会なくても」って言われたらどう  
しよう、っていうのがありますねえ、いつも……

石崎 あんまりまじめな話違ふけど、立候補者に芸人おりませんね。  
人の関心引くの、あまりにもワンパターンで……

池町 僕もそう思って、引き込む力ないですね。理想として言うし

かないけど、会長が魅力的で、できるだけ多くの人と接してっ  
ていうのしかないな、という気がして……。

中瀬 私でもね、入る前は魅力的でいようと思うけど、入ると、行  
事に追われるわけです。光を放ってた人もくすんでしまうよう  
な雰囲気、あの部屋にあるんです。だから、本部の根本的魅  
力が不在ですね、一生懸命っていうのはわかるけど……。で  
も外部からどうして見えないんでしょうねえ。

池町 やっぱり食わず嫌いなみたいなんじゃないか。来てくれたら  
協力的やし、アピールが足りないのかなあ。

中瀬 それと、本部がやりすぎるといふか、働きすぎみたい……。  
池町 一生懸命やってたら人がついて来る、と言うか、そういう感  
じで……。それと、代表会議が連絡場所になってるでしょ。中  
学なんかでは、あそこで話し合ってたんですけどね。

稲葉 承認だけやもんなあ。

池町 時間的なこともあるけど、パイプが途切れるでしょ。会議開  
いても会長がこれなかったり、来ても伝わらなかったり、ブチ  
ブチになって……。

中瀬 それは、自覚やと思います。委員も立候補でないから。なれ  
ば義務を果たすっていう諦めや思い切りのよさが無いでしょ、  
この学校。だからね、承認しか取れないんです。

高堂 試しにやってみてもいいなあ。

中瀬 やってみるべきですよ。みんな、予餞会の予算なんかも、  
どういふものか知らんでしょ。

# ☆「何事も経験経験。」「失恋も？」

中瀬 男女交際について聞きましょうか、多いですねえ。

石崎 そんな話題になると話すことがないですねえ、欲しいとは思  
いますけどね……。三年生は前からある所はあるけど、今は受験  
理由に断られますね。ただの口実かも知れんけど(笑)

中瀬 でも思ったより多いですね。修学旅行でも、一人者はつらいね。

——修学旅行の話ひとしきり——

池町 これは個人の問題ですよ。それと、やっぱり経験、ないより  
ある方がいいでしょ。失敗も要りますよ。やっぱり、ね。

# ☆持つべきものは友と夢

中瀬 じゃ最後に、これからの自分について、新一年生へひと言。

石崎 水産の方行こうと思って……。夢は水族館の館長ですが……。

(周囲から歓声。興奮したささやきがしばらく続く。)

高堂 そうですね、打ち込むもの持ってほしいですね。

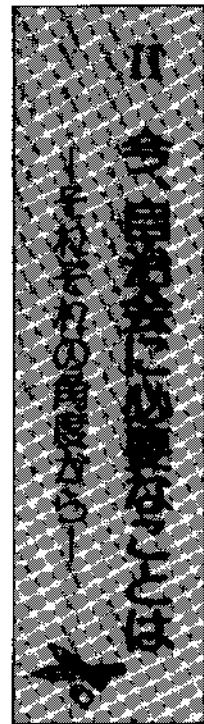
稲葉 特に何もせんでも、それなりに生きて行けるんですね。だか  
ら何に対しても積極的に生きていって欲しいです。え、僕は、  
将来は、エネルギー関係に……。

池町 「たかが」と「だから」を持って欲しいですね。誇りと謙虚  
さと。「大手前だから、こんな事……」と、「たかが大手前だ  
から……」というのを。

真鍋 下校クラブやったんで、クラブとか何かをすることが必要や  
と思います。友達を広げて行くのが必要なんじゃないかなあ。

福島 最近になって、クラブ入りたいと思ったりします……。

中瀬 グワッノもう時間ですよ。残念やけどこの辺で——しかし今日  
はほんまに楽しかった。皆さんどうもありがとうございました。



## 一人の生徒として

後期自治会会長 片岡茂季

「なんで会長になんか立候補したんや。」よく耳にした言葉だ。なんのことはない、自分の成長のためなのである。学校のためとか大義名分を掲げて立候補したわけではない。公約や立会演説会で言ったことと全然違うじゃないか、と怒られそうだが、まずその心配はないであろう。間接的なものとして、立候補の理由はもう一つある。任期が半年ときまっていることだ。終わることの保障された苦勞(?)は苦勞じゃない。こんなことはよくあるんじゃないか。旅行に行くのにわざわざ夏のインドへ行ってみたり、禪寺へ座禅を組みに行ったりする人がいるそう。彼らはある決心があつてそうしたのだらう。しかし少しの間がまんすれば帰れるということが頭にあつたにちがいない。僕も同じだ。だから「甘ったれた気まぐれで立候補したのか。」と言われたら返す言葉がない。みんなに悪いことをしたような気がしないでもないが、気まぐれもたまには必要だ、ぐらいに思っている。

自治会の仕事をするようになって、あたりまえの事が実感としてわかってきた。自分から率先して動かなければいけないとか、話し合いは大切であるとか、行動には責任が伴うとかだ。最後にあげた

ことが僕にとって一番の勉強になった。自分で責任のとれないことをやるわけにはいかないということだ。消極的になれというのとはちがう。ここの兼合いが難しい。自分自身はがんばっているつもりでも不勉強であるがために、その行動はしばしば無責任なものになってしまふ。無責任な行動は当然許されない。そうなると面倒臭くなって、事勿れ主義に陥ってしまうことがあるのだ。

自治会に対する無関心がよく問題にされる。自治会側が非難されるべき点を含め、いろいろな原因が考えられる。責任転嫁だと思われるかもしれないが、この自治会への無関心は現代という時代の流れの一つだと僕は考える。そして若い人の社会に対する無関心もその流れの一つであり、大手前生の自治会に対する無関心と何か関係があるように思う。学校からもらった国語の参考書の第十課——文章を書く力を身につけよう——のところにこんなことが書いてある。

「社会・時事問題に関する文章、政治に関する文章では、人道主義的立場青年らしい正義感で率直に述べるのとどめておくべきだ。」僕も全くその通りだと思ふ。逆に、高校生ぐらいなら人道主義的立場でしか社会を語れないと思ふ。そしてここに若い人の社会に対する無関心の原因があるんじゃないか。つまり若い人のなかに、燃えあがるような正義感を持った人が少なくなってきたと僕は考えるのである。反抗しているようでいて結局のところものわりのいい人間が増えてきているんじゃないかと思ふのだ。少なくとも大手前にはそれがあてはまる。正義感の強い人が、立会演説会るとき騒いだり、授業中寝たりなんてできないはずだ。そして道義上間違つたことをしている人を見つけたら注意するはずである。また正義感が強く人道的立場から物事を考える人が、今の社会に対して無関心

若者よ 「いま」を見つめよう

でおれるだろうか。ある詩の一節を紹介しよう。"I would if I could but I cannot, I know" (もし出来ればしてもいいけれど、私には出来ないし、そんなことわかっていることだし) なかなかうまく言いあてていると思いませんか。大手前高校のムードを、大袈裟に言って現代の社会のムードを。

話が大きくなってしまった。正義感などをひっぱり出したのも、皆さんの自治会に対する態度が、無関心というより無視に近いといえるからなのである。

はたして僕も正義感の弱い人間である。生徒総会をさぼった経験もあるし、授業中寝ることだってある。だからというわけではないが、僕は皆さんの良心に訴えて自治会に関心をもってもらおうとは、さらさら思っていない。皆さんが無関心ではおれないような魅力のある自治会をつくろうと、努力しているのである。

## 自治会活動への誘い<sup>いざな</sup>

前期自治会会長 池町 俊彦

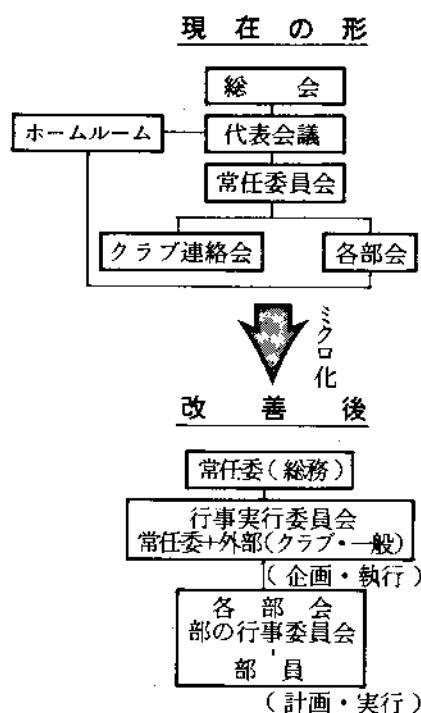
私がここで何を言いたいかという結論をまず述べます。今の自治会活動の問題点とその答えは、スプリング21号で多面的に述べられています。人数が多いことで、独り善がりでない真の実体が見わたせるのではないかと思います。よく考えられた文章ばかりなので、再読、再々読の価値は十分にあると思います。したがって今、自治会に何を求めるのかといったことを私なりに述べるとすると、あの先輩の文のここにある、この先輩のあそこにあるという具合に重複してしまいます。だから、通して再読してもらおうことをお勧めする

のですが、そこで次に、先輩方の提案された内容をどうやって今の自治会へ導入するかということを考えてみたいと思うのです。

まず第一に、自治会活動を阻害しているものが二点あります。一点は「自治会本部と会員の単なる誤解」という事ともう一点は「行事のかたよりによる弊害」という事です。一点めの「自治会本部と会員の単なる誤解」とは、どういう事かというと、会員が自治会活動に無関心であるとかよく言われますが、会員個々についてみると、そうでないようです。当然、我々大手前生の誰もが、自治会を運営する能力を持っていますし、中学校で生徒会活動に参加した方も多いのではないかと思います。そこから考えても、自治会活動に無関心でありえないと思います。つまり、自治会本部と各ホームルームとがうまくつながっていないということが原因となっていると思います。なぜなら、無関心、無関心と言っているのは誰でしょうか。無能、無能といっているのは誰でしょうか。会員が自分たちが無関心だといって悩んでいるのではなく、本部が無能だといって悩んでいる訳ではないのです。岡目八目ということがあるように、第三者から見れば、無関心、無能が現実であって、無知の知が大切だと思いますが、殊、この問題に関しては本部、一般会員とはいえ、同じ目的の上に立つ当事者なのですから、相手を批判するための一方的な見方つまり誤解であると思います。別の例として行事では自治会本部も各クラスも一生懸命に取り組んでいます。だから、そのことによっていつのまにか、一般会員は自らの称される無関心、本部は無能の上にあぐらをかき始める。つまり甘え始めるのです。だから、互いがこの意識をまず取る必要があります。二点めの「行事の偏りによる弊害」は、皆さんも御存知の通り、一学期の早い時期に行事

夢の様な過去は消えて行く 一人だけでただ歩く もう誰もいない

が偏っているということ、何もかもが、その場しのぎのものにな  
っているということです。入学、進級をして、新しい環境の中で自  
分の位置を探りしている状態で、このように目白押しにあっては  
私たちには大変だということを知っています。それと同時に、自治  
会本部も僅かな人数で忙しすぎるのです。行事の日程というのは、  
教育的な配慮や入試といった理由から動かしがたいのですが、こ  
のことについても考えてみる価値があると思います。これは、後輩に  
任せます。



そして第二に、よく注意してみると、ホームルームと本部のつながりは、部会における連絡事項の伝達・承認ぐらいで、文化祭後のアンケートで、「文化祭をもっと楽しくやりたい、規制が多すぎる」という意見が多く、また、文化祭のあるべき姿とその表現などという根本的な問題の話し合いをする時間が確保できません。今、自治会活動を盛んにする糸口は、まず文化祭だと思います。だから、こ

の現状を改善し、本部と本当の自治会活動をする機会を与えるためには、新しい機構が必要です。しかし、何も目新しいことではなく本来の形であると思いますが、ここで提案したいのが、部会をフルに活用する「行事实行委員会」の設置です。これは今までの常任委員会の仕事を引き継ぎ、構成は常任委員及び外部（クラブ・一般）から成り、原案を作り、部会に割り当て、部会は実行できる段階まで原案を練る。そしてホームルームへ伝達するという方法です。その時部会でも、副部長を中心として部員の互選で各学年2名ずつ6人ぐらいで部の「行実委員会」を作る。このようにすれば、本部は見渡す総務となり、代表会議を開いて、根本的な話し合いもできるようなになると思います。ひいては、行事がスムーズに行くと同時に、各種の問題に取り組むことができると思います。ここで、矛盾するようですが、これは小手先のことであると思います。不備な機構を改善する一方、我々皆が自らの甘え・従属を断ち切り、自治的な人間になる必要があると思います。世の中では、みせかけの平和のもとで、軍靴の音が大きくなり、社会問題が多く発生し、高校生らしからぬ生活を送っている人も多いそうです。その中で我々大手前生は the salt of the earth にならなければならない。そのために、今、自治会活動は必要であると思います。

## 師走に想う

三年五組 尾上 誠人

編集委員から、自治会欄一ページを任せられた時は、何とか書けるだろう、と引き受けたものの、いざ筆を執るとうまく進まない。

「自治会」という、今まで深く考えたことのないテーマだけに、「自治会に対する生徒の無関心が……」とか、「自治会本部のあり方が……」など、取り留めもない、ありふれた問題が浮かんで立ち消えてしまふ、という始末だ。締め切りまであと数日、という焦りも加わり、「編集委員に謝って、誰かに替ってもらおう。僕にはできない。」と思った時、ふと頭を「可能性」という文字が横ぎった。可能性——人はそれぞれの生涯において常に（特に若い時代に）、この可能性というものを抱き、信じ、そしてそれを試しながら、人生の歩を進めてゆく。「今度、席次を三〇〇番上げれば、俺も京都大・法学部を受験できるのでは。」とか、「もう少し練習に励んだら、インターハイに出場できるかも。」とか、「これほど真剣なのだから、交際を申し込めば、きっといい返事がもらえるさ。」などと言うように、次元の低い例ではあるが、実際、誰しもこのくらの「可能性」を多かれ少なかれ抱いていると思う。無論、少し突き放して、現実を冷静に見つめれば、それが単なる「夢」に過ぎないことは当人も気づくであろうに、何故、微かな可能性に期待をかけ、胸躍らせるようなことをするのだろうか。それは、人は夢を碎くような現実とは、極力見ないようにしているからだ。こう言うと、冷めた人でなくとも、「そんな可能性ばかり追い求める人間は、弱い、つまらない奴だ。」と言うかもしれない。確かに理屈はその通りだ。小さな可能性を追う、ということは、裏を返せば、逃避的な行動をとる、ということに相違ないからである。でも、僕はそう思わない。寧ろ前者のように可能性を追い求める人間の方が、血の通った人間らしく、また、何らかの形で開花すると思う。なぜなら、たぶんこのような人は、いつの日か必ず理想のギャップを目の当た

りにし、打ちのめされるだろう。が、その一つの壁を突き破り、乗り越える時、その人はひとまわり大きな人間に成長するに違いないのだから。

さて、こうして可能性を試そうとする人は、積極的になるだろう。これは必然の結果なのだが、この積極性こそ、若い時代を生きる僕等には、かけがえのないものなのだ。何故、積極性が若い僕等にとって大切だ、と言うのか。それは、短い人生のそのまた限られた部分にすぎない、心身ともに、若い時代が、行動に踏み切りたい、という願望の、生涯を通じて、最大限に叶えられる時期である、と思うからだ。この時期僕等は、まだ世間はもちろんのこと、自分自身の素質の程度もよくわかっていない、いわゆる、世間知らず、身の程知らずの状態である。そんな恐いもの知らずの状態だからなおさら、積極性を発揮すべきではないだろうか。実社会に身を投じてからでは、し難いことは星の数ほどあるし、また、若い時代に、積極的に行動して、たとえ失敗に終わったとしても、「ああ、あの時は……」と、ニガ笑いを浮かべることがあっても、後悔することはほとんどないだろう。

型にはめるつもりはないが、誰もが心の片隅にこのような可能性や積極性を携えていれば、冒頭で少し触れた、自治会に対する無関心云々といった問題が、自治会役員を悩ませることは無くなるだろう、というのは、あまりにも楽観的な見解だろうか。いずれにしても、最近、人間がひとまわり小さい、と言われる大手前生、もっとビッグな人間であってほしい、と最後に一言、書き入れておこう。



## ★インタビュー★

「あのーちょっとおたずねしますが」



期末テストが真近に迫る、十一月のあわただしい校内で、何人かの生徒諸君に自治会に関するインタビューに協力していただいた。

◇ ◇ ◇

（やや緊張した面持ちで私たちはまず食堂に向かった）

— 今の自治会の活動ってのは活発だと思いますか？

A 公報読んだら、陰で必死でやってはるなって感じます。（Ⅱ女）

— あのー、もし会長になったら、何やりたいですか？

A 今はやりのね、五無主義の蔓延してきてる大手前をね、精神面で革新したいですね。（Ⅱ女）

— 会長になったら、やりたいことは？

A 裏門の設置です。（と、はにかみながら。）（Ⅲ女）

（しきりにうなづくインタビューア。そうなんですよ）

— 自治会本部の活動について何か……

A もっと、何回も公報出して欲しいと思います。（右同）

— 自治会を、一言で定義してみて下さい。

A むずかしいけど……学校生活の中心かな、と思うわ。（Ⅲ男）

（オオッ、と周囲のざわめきの声。）

— 会長になったらね、最初に何したいですか？

A 活発な自治活動。例えば、風紀の徹底と清掃の活発化。（Ⅲ男）

— 本部の活動については、どうですか？

A ちょっと力がないんちゃう。投書箱もいいけど、最初ごみ箱かと思った。（右同）

— 今の自治会、何か欠けているとしたら、それは何でしょう？  
A んー……。し……思想。（インタビューア、ウーンとうなる。傍らの者うなづく）（Ⅱ女）

— 自治会本部に対して、どういうイメージをお持ちですか？

A 暗いですね。自治公報以外、何もわからへんし。（Ⅰ女）

— 最近、投書箱が設置されたけど、あれについてはどう？

A いいと思います。でも、用紙がついてないから、持参しなければならぬというところに、問題があると思います。（Ⅰ女）

— なるほど。今度本部に言ってみましょうか。（とインタビューア苦笑しながら）あなたは、会長になったら、最初に何したい？

A あ、トイレ増やしてね、常に紙を入れておく（爆笑）（Ⅰ女）

— （キャンディをかじっている男子に）役員になってみたいと思っただけありますか？

A ない、ない。（Ⅰ男）

— （場所は変わって、吹きっさらしの自動販売機横でコーヒースする男子グループ）会長になったら、一番にしたいことって何でしょう。

A 俺、アナーキストやから興味ないねん。（と本人は冗談っぽく。周りはドキッ）（Ⅱ男）

— ……と言うことは、本部はあっても意味がないと？

A ま、そんなところでしょ。（またまたドキッ）（右同）

— あなたは、いかがですか？

A ま、今の自治会も、よりやってるけど、L・H・Rをもう少し学年全体で活用するとか、そういうものを増したら？（Ⅱ男）  
— 座談会なんかに行けへんのは、魅力がないからでしょうか？

A ウーン、やっぱりよう知らんからとちゃうかな。皆に感じがわかってもらえてないんとちゃう。そういう俺かって、よう知らんもんな。

(右同)

――自治会本部を、一言で定義してみても  
 さいいますか？

A ムードわからんけど、まあ、和気藹々と  
 した男女同伴喫茶とか。(爆笑) (右同)

――あなた、どう思います？(まだ笑いが  
 止まらないインタビュー)

A んー、形だけの何かちゃう？(とあっさ  
 り)

(Ⅱ男)

――(皆が帰りをいそぐ放課後の校門にて)  
 自治公報読んでありますか？

A 全く読んでない。そのまま折り曲げて、  
 結局は捨てると。

(Ⅱ男)

――自治会本部に、どんなイメージお持ち  
 ですか？

A 割と、行きやすいって感じします。

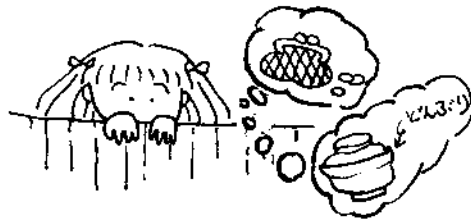
(Ⅰ女)

――投書箱については？

A ものすごい、いいと思います。中学の時はなかったし。(右同)  
 ――会長になったら、初めに何します？

A 募金箱作ってね、校内だけでなく、学校全体で施設やチャリテ  
 ィー番組に協力するとかいう事にも関心を広めたいですね。(Ⅰ女)

――座談会開いても、行かないのは、どういうわけでしょう。  
 A やっぱ、固い雰囲気があるからやと思います。(Ⅲ男)



――本部の雰囲気、皆、暗いって言うんですが、なぜでしょう。

A 一部の人だけでやってるっていうイメージがあるから……。(Ⅲ女)

(Ⅲ女)

――座談会なんかに対して、消極的な理由は何でしょう。  
 A おとなしく行事だけをうまく進行するって感じでしょ。それだ  
 けやからちやいますか。

(右同)

――自治会本部に対するイメージってどんな……。

(Ⅲ女)

A フレッシュですね。

(Ⅲ女)

――がんばってるって感じますか。

(右同)

A そら、あの投書箱見て下さい。

(右同)

A もうちょっと飛躍して、突拍子もないことやってみたら。(右同)

(右同)

――本部に対して、どんなイメージ持っています？

(Ⅱ女)

A ……暇そうですね。

(Ⅱ女)

――今の本部には、何が欠けているんでしょうか。

(Ⅱ女)

A やっぱ、スケールの大きい人物が少ない。会長でも、もっと  
 度胆を抜くような人物が、本部には必要だと思っね。(Ⅰ男)

(Ⅰ男)

――本部というと、暗いイメージがあるという人が多いですが、  
 A 暗いね。本部いうたら、閉鎖された空間の中で、皆が机囲んで  
 ぐーっと沈みこんでるといふ感じしか湧いてけえへんね。(Ⅰ男)

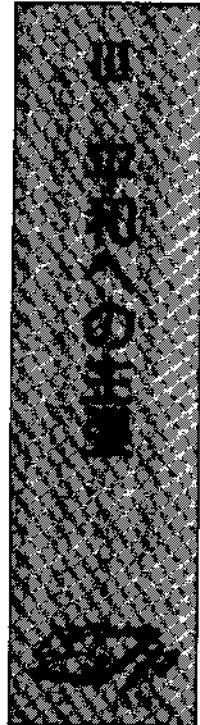
(Ⅰ男)

――じゃ、本部に何が欠けているんでしょう。

(Ⅰ男)

A (強い声で)本部に欠けているというよりも、一般生徒の心掛  
 け、むしろ、そっちの方が欠けているように思います。(と、か  
 みしめるように)

(右同)



## 平和と国民

一年六組 山本勝久

現在、日本とソ連が領土権を主張している北方領土は、ソ連が占領している。最近、中学生が北方領土を視察したことがあったが、これを一部の人々が平和教育を済し崩しにするものである、と、抗議のデモをしたことがあったが、これはおかしいことだ。ソ連は国後・択捉両島に軍事基地を建設しているばかりか、色丹島にまで軍事基地を建設しているといわれる。歯舞諸島と色丹島は日ソ平和条約が締結されれば日本へ返還されると、日ソ共同宣言第九項に明記されている。にもかかわらず、そこに基地を建設するなどとはそれだけで平和を乱すものである。その行為に対して日本が抗議するのは当然であり、国会でもほぼ全部の政党が抗議している。平和を乱すものの実態を見ることがなぜ平和教育を済し崩しにするものなのか。

日本人は北方領土については無関心のようなのだ。

中年の人の多くは、日の丸\*と云うと戦争を思い出すそうであるが、日の丸や君が代と云うとファシズムだとか、軍国主義へつながるなどとのしる人々がいる。軍国主義へ結びつけないところなどはなかなか日本人の敏感なところをよくついているようだ。ところで、オリンピック選手はオリンピックの競技に勝ち、日の丸が上がるの

を見たり、君が代が流されているのを聞くと、感動するようだ。それが当然でしょう。日本人は日の丸はすなわち愛国心、愛国心はすなわち軍国主義である、と考えやすい。しかし多くのことがらを軍国主義化へつながるものだ、と逃げてしまふところに、日本人の平和や北方領土についての無関心さが出てくるのかもしれない。米軍空母の日本寄港にはあれほどの反対運動をしておきながら、北海道の一部に他国が基地を建設してもあまりもり上がらないのもおかしい話だ。

世界に数多くある平和を乱そうとする国々に対して軍事力が強大であるなどで妥協していたのではそれらの国々に態度を大きくさせて、その結果軍事力にものを言わせて戦争をおこさせやすい状態をつくってしまう。

ソ連の潜水艦がスウェーデンの領海を侵犯した事件で、いっこうに謝罪もしないソ連に対してスウェーデン政府は強硬な態度で、また国民も抗議の集会やデモで抵抗した。その結果ソ連はついに謝罪したのである。

強力な軍事力を背景にして平和を脅かそうとする国々に対して、我々が決して妥協しない意志をもつかがぎり核兵器や強力な軍事力など何の脅威になるでしょう。核兵器廃絶や軍事力の縮小などでは平和は得られないでしょう。



\*認めたくないものだな。若さ故の誤ちというものを…… (コックローチ・シャア)

## 軍靴の音高まりゆく日々にかけて

三年七組 小菅 陽子

今や、日本列島にカラスの鳴かぬ日はあっても、「ソ連の脅威」の叫ばれぬ日はない。それだけ政府のPRや、それに便乗したいいろんな方々のマスコミにおける御活躍はかなり成功していると言える。しかしはっきり言って、「北方」が「脅威」たるに都合悪い事柄についてはひたすら瞞目し、孜孜として「脅威」のイメージのみ鼓吹する「ソ連脅威論」を始めとする様々な軍事理論を、まず「本当にそうなんだろうか」という事を念頭に置き、事実と照らし合わせて思料すれば、それらがいかにか我々国民を欺瞞するものであるか、つまりは政府にとっていかに都合良いものであるか了解できる筈だ。政府の意図はミエミエである。「ソ連の脅威」を振りかざして国民を籠絡し、軍備拡張路線を突っ走る為である。何故か。国家を唯一の消費者とし、一単位のコストが莫大であるという特殊性を具有する軍需産業の体質からして、ありとあらゆる手段を尽くして政府に食い込もうと腐心し、各社共その売り込みに虚々実々と火花を散らすのは必然であり、つまりは札束が乱れ飛び、政府にそういう私利私欲の為の打算がある事を窺い知る事ができる。加えて、不況克服の為自国の兵器を買わせる事を目論む米國からの要請、そして強大な軍勢力を背景とした海外資本輸出の円滑化という事が挙げられる。後者は一見「国益」の為に見えてその実、一部独占資本の潤い・でしかないのだ。そしてそのツケは、増税と福祉の貧困化として我々庶民に回ってくる。民主主義国家の主権は言うまでもなく我々国民に存する。「国の為」に我々が犠牲を強いられるなどという事

の許される道理はない。「ソ連が攻めてきたらどうする。」などと短絡的に軍拡を叫ぶ前に、軍備というものが金儲けの為の手段、そして政治的道具にされている事実を直視して欲しい。

各方面から物議を醸し出した例の教科書検定にしても、政府の魂胆は明瞭である。丸木位里氏の「原爆の図」を政府は「あまりに残酷すぎる」という理由で削除させた。「あまりに残酷」なのは絵ではなく写真ではなく8ミリフィルムではなく、三十数年前紛れもない現実として存在した戦争という事実なのである。我々はこれを巧妙な、しかし歴然たる思想統制である事を断じて許してはならない。「戦争の恐しさ」を知っていてさえこんなにも簡単に懐柔されてしまっているというのに、それすら知らぬ人間がこの日本の大部分を占めた時の事を考えると、空恐ろしくなってくる。自分の言いたい事を言う為には命を賭けねばならない世の中にもなりかねない現実を、他人事と思わないで欲しい。

しかしながら、「攻めて来たらどうするんですか。」という殺し文句にあっさり「のせられて」いる単純な御仁があまりにも多いというのが現状である。「攻めて来たらどうする。」「攻めて来たらどうする。」で軍拡した結果が、現在の米ソを見れば一目瞭然、あの愚劣なイタチごっこである。軍備という存在のある限り、国家の安全保障など相対的ではない事を私は声を大にして言いたい。「攻めて来たらどうする。」からと軍拡するのでは戦争を根本的になくす事にはならない。それを考えるのが我々に課せられた明日への課題である。

要するに、今我々に一番必要なのは「懷疑する心」である。「ソ連は脅威だ」と聞けばすぐそう信じ込み、「攻めて来た時守らねば

ならない」と聞けばそうだ軍拡すべきだなどと言いだす。これ全て懐疑の足りなさや社会的無関心から来たものだ。「祖国を守るのだ」などと国民のナショナリズム（解った様な解らない様な言葉だ）にこちよく響くキャッチフレーズに「のせられ」て本当の敵を見誤るな、と言いたい。氾濫する情報をそのまま鵜呑みにしたりする事なく、素直に首肯してしまう前にまず疑い、そして思考し、誰にも眩惑される事のない自分独自の理論を形成する事が必要なのである。それは自分で自分を「守る」手段なのだ。安易な現状追認こそが、我々にとって最も危険な「脅威」ではないだろうか。最後につけ加えるならば、やはり、どんなにもっともらしく、説得力のある理屈で論駁されようとも、「戦争は酷い。だから戦争はイヤだ。だから戦争につながる一切のものはまっぴらゴメンだ。」という三段論法（？）は素朴だがしかし紛う方なき根本的理念であり、絶対的真理であると私は信じる。

でいすかつしゅん

—もし愛がなければ—



二年五組 聖エリザベスの花

ここは大手前高校のある教室である。先ほどから二人の少女が熱心に語り合っている。

「まあ、どうして？あなた一年生の時からあんなに『社会福祉のほうに進みたい』って言ってたのに。」

「ええ…。何だか自信がなくなっちゃったのよ。このあいだテレビでね、あいりん地区の人たちの姿を見たんだけど—あ、

誤解しないでね。決して『汚い』と思ったんじゃないのよ。その人たちね、全然笑わないの。食事を受けとりに行く時も。自分の外の世界に何も興味がない、っていうのかしら。その時、私思ったの。私じゃやっていけないな、って。

—ええ、これは私のエゴだということとはわかってるんだけどね、私が生活している範囲において、大抵の人は私がすることに対して何らかの反応を示してくれるでしょ。でも、私がおもひあ地区に入り込んで、どんなに頑張ってみたところで私が与える『やさしさ』とか『ほほえみ』は、きっと期待できないと思うの。私、甘えすぎてるのかしら？」

「…。そうね。でも、あなたの気持ち、私にもわからないではないわ。自分からやさしい言葉をかけたのに、つつけんどんな返事をされたりすると裏切られたみたいで、少し腹が立つて…。あとで悲しくなってくるもの。」

「あなたでも？」

「私、ちっともやさしい人間じゃないわ。で、さっきの続きだけど、でも、あいりん地区の人たちにそれを求めるのは無理だと思うの。だって、家族もなくて寂しい生活を送っている人たちでしょ。…難しい事だと思うけれど相手に求めることよりも、そういう孤独もすべて包みこめる様な広い心を持つことが必要だと思うのよ。」

「広い心か…。でも、それは飽くまで『理想論』でしかないわ。実際に今の社会で—」

「ええ、理想よ。私たちがそういう人間にならなくちゃいけない、っていうことなんだから。私、前に京橋の駅で吸いなら

入れを掃除しているおばさんを見たことがあるの。痰で汚れていた、煙草の腐った様な臭いでいっぱい臭いの所を黙々と働いているの。私なんて、その臭いだけで気分が悪くなってしまうのに。——私その姿を見て、本当に美しいと思っちゃったの。もちろん、それがそのおばさんの仕事なのかも知れないけど、言わば『世の中の汚れ』である部分を『報酬があるのなら働いて当然』という無責任な社会の見方の中で、自らの手で清めていくんだから。隠れたところで人のために尽くすということが、愛なんだとわかったような気がしたわ。」

「愛っていう言葉は——私たち、今の年代では恋愛しか知らないような顔して生きているけれど、もっと広い意味での『愛』を考え始めないといけないのかも知れないわね。」

「ええ。あいりん地区の人たちにしたって、直接の原因はわからないけれど、社会的な愛の欠如、同じ人間でありながら自分の方が優位に立っているような無遠慮な視線のために、心を閉ざしてしまったんじゃないかと思うの。『少女趣味的な考え方だ』って笑う人もいるかも知れない。だけど、だからこそ私たちからもう一度ほえみかけて、愛の回復をしないとだめだと思うのよ。」

「そうね、その通りだわ。『もし愛がなければ、いっさいは無益である』っていう言葉を知っているけど、どんなに尽くしてあげたいと思っても、自分の都合で、あわれみを垂らすだけじゃだめなのね。本当に、自分の『大切な人』として愛さなければ……。ありがとう。もう一度考え直してみるわ。」

「ううん……よかったわ。でも、今の日本にあいりん地区の人



たちと立場は違っても、孤独な人っていうのは、たくさんいると思うの。これも、あなたに理想論だ、って言われそうだけれど……いくら高収入で水準の高い生活をしていても、真摯な生きる姿勢がなければ、それは寂しい事だし、『生きがいがない』ということも、どんなに多くの人に囲まれて生活していても、孤独な状態だと思うの。私、政治問題とかあまりよくわからないけれど、少なくともそういう人のいる限り、日本は平和じゃないんじゃないかしら。『平和』っていうのは、一人一人が幸せで、お互いに愛を持って生活することだと思うから。……二人の会話は、まだまだ続く。

「平和」とは？——単に、争いがないだけが平和ではあるまい。(これすらも実行できていないのが現状だが) 平和とは、本当に一人一人の心の問題であると、私は思う。確かに物質的豊かさによって平和に感じる人もあろうが、それだけではなにかが不足しているはずだ。それを見極めると共に、日々、実践すべく努める人間になりたいものである。

## ”平和の砦”を守れ！

三年七組 寺西章江

「過ちは二度と繰り返さない」と誓った人類、少なくとも日本人はそう誓った筈なのであるが、その誓いは年を追うごとに甘やかされ、単なる歴史のページとして片付けられかねないというのが、その現状である。新聞に目をやれば、『軍備拡張の要請』だの、『中性子爆弾』だのといった物騒な文字が、何の恥ずかしげもなく

紙面をうめている。我々がそのために、漠然とした不安に包まれるのも当然、むしろ慣れっこになってしまつて無感覚に陥ることの方が怖い。しかし、である。ここで我々は、「いよいよ第三次世界大戦も遠くないぞ。一体どうなるのかな」などとつぶやく前に、今一度立ち止まって、考えてみなければならないことがあるのではないだろうか。

学歴社会によって競争心を植えつけられた人間は、何を望むようになるか。「自分がその内において、よりよく生きる」ことよりも「他人より優れる」こと、つまり「自己に勝つ」ことではなく、むしろ「他人に勝つ」ことに、重きを置く者が増えてしまつたのだ。過ちは繰り返さない」というあのことは、「今回は戦争に負けてしまいました。けれども、次回はそんなヘマをせず、きつと日本が勝つてみせます」という意味では無論、ない。紛れもなく、「戦争はもう致しません。平和のために、努力をします」という、強い意志の誓いなのである。平和を願わない者はないと言いつつ、その実、平和に背を向けて突っ走る現代社会の姿が、見えるようではないか。だが、そのような競争心ほど、戦争を望む人々にとって好都合なものはない。あとは、どこを敵国に定めるかを考え、マスコミによってそれを広め、社会不安を増長してもらえばよいだけのだから。現に、ソ連という軍事大国が仮想敵国ということになっており、いったん戦争が起これば何の役にも立たない自衛隊（多少軍備増強をしたとしても）が、もしもソ連などの国が攻めて来た時の為に「おかれ、渾大な軍備費が支払われているのだ。我々はマスコミに踊らされている。社会及び政治は、「自分は血で手を汚すことなく戦争によって利益を得ることのできる一部の人々」の望み通りに動かされ

ようとしており、我々はそれに利用されているに過ぎない。この事実を認識することは大切である。先ず、そうすることだ。

戦争とは狂気であり、それ以外の何物でもない。戦争は、生きること、又、生きることの意味、それら総てを否定する。いくらキレイ事を並べようと、論理的に筋道が通つていようと、解決を武力に頼る、人と人との殺し合い、ただそれだけだ。ヒロシマ・ナガサキの原爆の記録写真は、無言でそう語る。ここで我々がしなければならぬのは、原爆やその他戦場の記録写真などから、目をそむけないことである。じつと見つめるのである。悪夢でもなく、嘘でもない。それらは厳然たる事実である。たとえ教科書から排除されようと、皆が忘れ去ってしまおうと。

何やかんやと今更そんなことを言っても、どうしようもないし、もう遅い、という人がいるだろう。私は答える「確かにその通りかもしれませんが。けれども、平和を破壊する導火線となる最も恐ろしいものは、その諦めの心じゃないでしょうか。」戦争は避けるに越したことはないが、侵略されようかという時には、やはり自らを守る努力をせねばならない。自衛隊などに頼るのではなく、国民全体が立ち上がり、自らの命を自らが守らねばという、正に自衛本能なのである。死ぬ時は死ぬ時、なのだから。又、どんな世の中であろうと、理想は捨てるべきではない。暗闇だからこそ、なおさら光が要るのだ。我々一人一人の心の中には、決して譲ってはいけない。平和の皆がある。それを脅かそうとするものが多ければ多いほど、我々は執拗に守らなければならない。

「私の皆は大丈夫だろうか？」私は時々心の中を、そっとのぞいてみるのである。

# 疑問

庸子

左の方から風が吹く

底には幾つかの冷氣が歩み寄る

小さな植木鉢がガシヤリと鳴った

湿った土が

崩れ

広がり

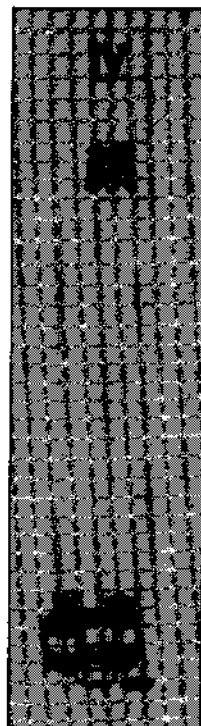
稀薄な一つの抵抗を試みる

太った鳩は逃げることもせず

黙って見ていた

これが平和か？





## FORCE—FACE—PEACE

二年八組 西野和義

「貴方ではありませんか？」

白髪の痩せた老人が黒っぽい安物のハンカチを摘み上げながら言った。私が手洗へ行こうと脇を通ったとき、彼は声を掛けてきたのだ。

「や、これはどうも有難う」

私の声は少し上ずっていたかもしれない。

老人は眉ひとつ動かさず、ハンカチを私に手渡すと読みかけの雑誌のページをまた繰りはじめた。私は腋の下に冷や汗をかきながら、大切にそれをポケットに収めた。

コンコルドは地球の影の部分に入っていた。空気を引き裂くその速度に反して、機内は異様なほど静かである。私の席は前の方であるので、三角翼に邪魔されずに薄い雲を通してぼんやりとした都市の光と、大気が希薄のため地上のものとは較べものにならないほど鮮明な星空を同時に眺めながら物思いにふけることができた。機内の照明は落されてはいたが、窓ガラスは少し疲れたような私の顔を星や都市のイルミネーションを背景に浮かび上がらせていた。

遺伝子工学のめざましい発達においては、完全な遺伝子操作技術を完成させるのにそれはどの時間を必要としなかった。が、しかしこれらの研究は厳重な監視下に置かれ、軍事機密の厚いベールの下に隠されていた。さらにその技術の易しい応用として、理想的な軍隊を作る計画が進められていた。『培養部隊計画』である。

戦士に必要な筋力、持久力、運動神経、反射神経、知能、精神力などに優れた素質を持った各々の遺伝子を切り張りして合成し、クローニングして、さらに高度の軍事教育を施せば、彼らは全員一様に最高の能力を持つ戦士として誕生する。何百、何千人ものクローン人間で編成された彼ら培養部隊は史上最強の軍団となるだろう。

星は不動でしかも瞬きもしない。しかし強化ガラスの窓の外には音速を越える空気が悲鳴を上げながら飛び去っているのだ。

培養部隊計画のベースともなる遺伝子を合成したのが先ほどの白髪の老人なのである。彼はさらにそれを核とした細胞を作り、必要な数に足るだけ培養した。そして約一年後にはその細胞は人間の形をとり、数十年後には部隊が完成するだろう。彼はそれまでに老いて死ぬことになるのだが。

そしてアインシュタインたちがマンハッタン計画で受けたような汚名を死後、背負うことになる。しかし彼は優秀な科学者として、それには耐えられなかったのだ。いや一人の人間として阿貴に耐え切れなかったのだ。

ずっと昔から知っていた様な、そんな気がするアナタが好きです

＊ ＊ ＊

当然のことながらクローニングによって個々の遺伝子は少しも変化しない。でき上がった部隊の人間一人一人は個体としてなんら差はない。彼らは全て実質上、一卵性双生児であって、千人が千人とも同じ血液型、同じ組成タンパク質、同じ肌、同じ髪、同じ声、そして同じ風貌なのである。整列した彼らの顔は寸分の違いもなく同一であり、それが何百人と直立して指揮官を熱意のこもった目で見るのである。そして彼らはその特徴のために独特の強い連帯感を持つようになり、さらに軍隊として完成されたものとなる。

＊ ＊ ＊

彼は密かに私に接触してきた。彼の国と敵対する私の祖国では、まだ遺伝子合成の技術は完成されていない。しかし私は彼からそれを盗もうなどとは考えていない。私は一人の科学者として彼の憂いに共鳴したのだ。我々は培養部隊計画を滅茶苦茶にしてやろうというのである。

しかしただ騒ぎ立てるだけでは、強力な軍部の力はそれをいともたやすく握り潰すだろう。我々は軍に属している科学者としてその恐ろしさは十分理解している。しかしそれでも、我々はこの培養部隊計画だけでなく、さらに軍事活動全体にまで回復不能なまでの損害を与えようというのだ——たった二人で。

私はそつとポケットに手を触れた。そこには細胞核のプラスチック封入されたカプセルが縫い込まれたハンカチが入っている。彼が厳しい監視の目を盗んで作ったものだ。私はこれを祖国に持ち帰り、

我々の国の科学者が遺伝子合成の技術を手に入れるまで待ち——もう数年もかからぬだろう——我々の国で作った最強の戦士の細胞核とすり替え、これを使って我々の国の『培養部隊計画』を進め——どここの国でも同じだ——我々の国の最強部隊を作るのである。

必ずうまくゆくだろう。戦士の顔というものは無論両国ともトップシークレットであって、絶体に公表される訳がない。そもそも培養部隊自身、秘密兵器なのである。

もし彼と私の国の培養部隊同士が同じ戦場で戦うことがあるとしてよう。彼らはおたがい自分の敵が自分自身と同じ顔、いや同じ遺伝子をもつクローン人間であることを知るだろう。そして彼らの戦闘は単なる同士討ちに異ならず、その戦争は無意味であることに気付くだろう。そして我々の両国は膨大な時間と費用を費やした秘密兵器がまったく無能になったことを知るだろう。さらに彼らクローン人間たちは無意味な戦争を行なわせようとするそれぞれの国に対して戦旗をひるがえすことになるにちがいない。最強のしかも二倍の軍団に対して我々の国の軍部はどんな鎮圧の手を打てばよいのだろうか？



数十年後、我々が死に、このような劇的なカタストロフィーの後、に今までよりはさらにによりよい平和が訪れることを我々二人は強く

山は緑、空は青、雪は白　うれしいなー

確信しているのである。

機体は少し左へ傾きながらしだいに高度を下げはじめた。間もなくその銀色の翼を恒久の太陽がまぶしく照らすことになる。

## 波と嵐と

二年二組 高堂 透

波は静かだった。海はどこまでも続いていた。太陽は燦爛と光をそそぎ、雲は水平線近くにそのからだを横たえていた。小さな船が一艘、海の上にあるのはそれだけであった。

保は甲板に膝を立てて座り、父たちの作業を見つめていた。少年は生まれてはじめて島が見えないほど沖へ出たのがうれしくてたまらなかった。ただ少年には一つの気がかりがあり、それがときおり頭をもたげてきた。「父さんはまだ怒っているだろうか。」少年はポツリと呟いた。実は島には昔から「ひとまわりしない子は海へ出ずな」という言い伝えがあった。つまり十二にならない子供は海へ出ずなというのである。しかし保はまだ九つであった。もう五十の声を聞くごま塩頭の保治、つまり保の父親は、たいていの島の言い伝えを信じていていい顔をしなかったが、同じ船の三吉と次郎が乗せてあげたらと言ったのでしぶしぶ承知したのだった。気のやさしい少年は父親をおこらせたような気がしてやまないのだった。

水揚げはほとんどなかった。その年は海流が変わったのか、水揚げは平年の半分近くまで落ち込んでいた。お昼近くになって、大人たちは休みをとってやや早めの昼食をとることにした。昼食時の話

題は自然とこの少ない水揚げの話となった。次郎は若く、すこしばかり学があったので、自慢気に、海流が南の方を通っているので魚の群れが来ない、などという、保治と三吉は黙ってそれを聞いていた。保は何もかもが珍しいかのよう、船の中をあっちへ行ったりこっちへ行ったりしていた。雲はいつの間にか空を半分ほど覆っていた。

昼からも水揚げはほとんどなかった。保はそれが残念であった。少年は二十歳をすこし過ぎた精悍な体つきをした次郎のそばで獲り入れを手伝っていた。この背の高い青年は保を好きだった。船主の息子というだけでなく、少年の明るいところを愛していたからだ。また少年も透けるような、パツチリとした目を向けてそれに答えていた。それにしても水揚げは少なかった。保は青い海を見つめながら、もつとつれないかなあと、そればかり考えていた。

そんな時、空が急に黒雲に覆われた。「これはいけねえだ。」島でも老練な漁師の保治は叫んだ。彼は三吉と次郎に命じて漁具をしまわさせて、彼自身は舳先を島へ向けた。「この雲はいけねえだ。それにしてもおかしいだ。今日の天気は夕方までくずれないはずだっただ。」彼はそうぶつぶつ言っていたが保の方を向いて大声で言った。「お前はそこの柱のところまでじっとしとくだ。」そう言う父親は舵を取りはじめた。保はそんな父が、あの真剣な顔が、とても頼もしかった。老練な漁師の直観は正しく、間もなく高いうねりが、波の牙が、船めがけて襲い、雨は容赦なく甲板を打ちはじめた。今まで島から静かな海しか見たことのなかった少年にはこの激しい変化を見せた海がとても恐ろしいものと思えた。降りしきる雨の中、幼い少年は、柱にしがみついて歯を鳴らしていた。四十近い、ちょうど保治とひとまわりちがう三吉は、少年の肩を優しくたたいて勇気づける

ように言った。「たもっちゃん。心配するたあねえだ。親父さんがついでるだ。大丈夫だ。」そういうと、この赤ら顔の小柄な男は、火も噴かんばかりにフル回転している機関の方へ行った。次郎はと見るとあっちへこっちへと急がしく立ち回っていた。少年はひとり柱にしがみつき恐さと寒さを凌いでいた。雨はますます強くなり、船は川に浮かべた小舟のように激しくゆれた。甲板は時として波をかぶり、そのままひっくりかえるかと思われるほど傾いた。少年の頬は恐怖に硬直したが、決して泣きはしなかった。父親は特に少年の母親が死んでから厳しく、少年に泣くことを許さなかったからだ。それで少年はしっかりと目を開き、海を、そして父親を見ていた。だがいくらしっかりしていて気が強いといっても少年はまだ九つであつた。いつしか少年は恐怖のあまり意識が朦朧としてきていた。

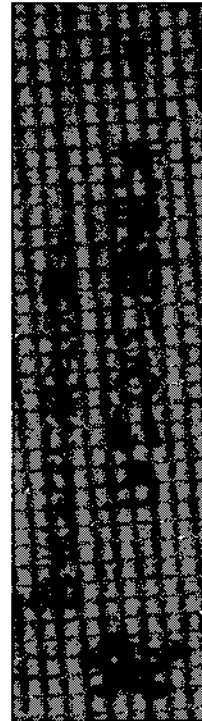
保治は必死に舵をとっていた。だがこの小さな船の小さな機関では波に次々と押し流されてしまうのであ

つた。彼は老練な漁師で、舵の操りも島で一・二であつたが、漁師というものは天候が悪くなるときには船を出さないものであつたので、こんな激しい嵐に遭つたのははじめてであつた。彼は一寸嵐が静かになった時息子の顔を見た。息子は氣を失つたのか眠ってしまった。父親は息子を、そのしがみついている柱にしばらくつけた。父親は息子のその凍々しい顔を見ながら考えていた。「やはり言い伝えは本当だった。いや、わしはお前を守ってみせるだ。きつと守ってみせるだ。嵐に負けるようなわしではないだ。」



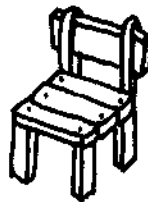
そして父親はこの息子の死んだ母親に、つまり彼の妻に向かって心の中で叫んだ。「保を守ってやってくれ。」父親は息子の母親を殺したのは自分だと思つていたのでめつたに口にできなかった。少年の母親が死んだのはこういう訳だった。ちょうど保が生まれた年も今年のように水揚げが少なかった。それで産後の肥立ちが悪かつた彼女は無理をして海女を続けていたので、病弱になつて保が五つの春に他界した。保治はそれが自分の所為だと信じ自分に厳しく、そして保にも厳しくなつていった。そんなことで父親は母親にものを頼むことに気がひけたが、息子のあどけない顔にはそうさせる力があつた。「息子を守ってやって下され。」父親は今度は神様にお願ひすると、保の頭をなでて舵の方へもどつていった。再び波が大きく、雨がきつくなつてきた。

保が目を開ますと朝だった。まだ意識がはっきりせずぼんやりしていた。体が動かなかつた。ふと見ると体が縛られていた。そのうち昨日のことを思い出してきて、体を縛つてあるのは海に落ちないためにだな、などと考へていると涙がこぼれてきた。深いしわの父親がやってきた。そのやつれた顔のようすでは嵐は一晚続いていたようだった。「保、起きたか、今ほどいてやるだ。」と言つて縄をときはじめた。保は父親に抱きついて言った。「ごめんよ、父さん、僕が来なんだから、父さんこんな嵐にあわなかつたんだよ。僕のせいだよ、ごめんよ……。」父親は優しく言った。「いや、お前もいつかは海に出ないといけないだ。昨日お前ははじめて海に触れただ。」保はこんなに優しい父親を見るのははじめてであつた。



★大手前高校に入学して思ったこと感じたことを、校舎・運動場・勉強・行事・友人、そして内面変化とに分けて書いて戴きました。

## 廊下・うぐいす張り



一年二組 H.O.+サニニウアイオン

ぎしっ、ぎしっ。薄暗い。職員室に面しているからテストが終わって成績を受けとりに行く時など、余計に暗い。本館一階の廊下。願書を出しに来た日だったか、天井にたくさん管が走っているのを見て、感動したのは。大手前がどこにあるのかさえ知らなかった。大手前がこんな所と知って、いささか失望した。偏に廊下の歩けば音はする、天井の管は見えている。ということに因る。私は、中学の時、廊下を音をたてずに歩くのが好きだったから。

中間テストの日、風疹にかかり、しかしそれに負けず、集会室でテストを受けた。廊下を通る人を眺めながら、最後のあがきをした。事務室前の電話機にもお世話になった。いろいろと用事をするよう

にもなり、集会室、談話室、会議室と軒なみ回ったが、時には、誰も来なくて、部屋から首だけを廊下に出していた。そういう時の廊下は、無情にも冷たさを増す。

だが時たま廊下が優しい表情を見せることもある。窓から日の光がやんわりと差し込み、ゆっくりと歩いている時など。そう、あれは、朝だった。誰かが帽子を私の頭にかぶせた。振り向く。笑ってそこにいる。端まで話しをして歩いた。その時、一番廊下は優しくなった。

晩秋の日、口もきいてもらえなくなった人から、一言声をかけられた。言葉自体は、たいした意味は、なかったが、何故か声をかけられたことが悲しくて、廊下を走った。廊下は、ぎいぎいと悲鳴をあげた。私といっしょに廊下が泣いてくれた。廊下が泣いていた。私は、この学校が好きで、場所をもっと知りたい。そしてそこに自分の場所を作りたい。廊下以外に。日光浴できる所、が理想。でも廊下には、いくつもの思い出がある。たぶん一番多く。だから、廊下を書く。だからそこを通る。

## 運動場のことなど

一年九組 林 伸 浩

わが大手前高校の運動場は狭いらしい。らしいと書いたのはぼくに狭いという実感が伴っていないからで、皆が「高校の運動場のくせに狭いなあ」と嘲けるのを聞いても、ふーんそんなものか、というぐらいには感じない。いや、それどころか受験の日に初めて

廊下を走るな、床が抜けるぞー。(Hの友人)

運動場を見たときには、「さすがは高等学校だけあって運動場も広いな」と感心していたぐらいだ。

なぜぼくがこのような感覚を持つようになったか——その原因は中学校にある。母校の名譽の爲、敢えて名前は出さないが、ぼくの出身中学の運動場は、それはそれは狭かった。テニスコート三面とれるかとれないかぐらいの広さである。斜めに計っても五十メートルないから、競走<sup>けいそう</sup>することもできぬ。そんな運動場を六百人で使っていたのだ。さらに悪いことには新築をやるというので、卒業する二ヶ月ほど前から運動場の真ん中にプレハブ校舎などをお建てたものだから、今なお運動場はないも同然である。

この様なあわれな学校も世の中にはあるのだ。運動部の方々よ、決して文句など言ってはならぬ。ありがたいことにわが校は大阪城のグラウンドを使用することもできるではないか。大阪城まで行くのがシンドイなど言ってはならぬ。そもそも運動部の活動とはシンドイものであって、それが嫌ならはじめから入部しなければよいのだ。

話をもとに戻そう。運動部に入っていないぼくは、運動場は体育の時間ぐらいしか使わない。あまりいいことでないことはよく分っているのだが、どうも進んで暴れ回る気にはなれない。やはりぼくは本質的に怠け者のようだ。最後に、この文章を続んでくださった人たちよ。ぼくの様なひ弱なやつになりたくないのならば、ぜひとも運動場をじゅうぶんに利用して下さい。

## 授業風景

一年二組 河野綾子

私の課題は「勉強について」だが紹介するようなこともないし、よくわからないことの方が多いのでこの学校に入って感じたこと——勉強について——を書きたいと思う。

まず初めに驚いたのは、スピードがすごく速いということ。そして、当り前のことだが、ぐっと本格的に難しくなったこと。そして個性的な先生方が多いな——ということ。

前二つはわざわざ書かなくてもみんな感じることであろう。だがいろいろな所から聞いていた「高校の教師」というイメージが初日からくつがえされたのである。全く教師とは思えないような（？）先生もいればその反対に教師然とした先生。ジョーダンを言わなくてもなぜかウケてしまったり、また何もなく淡々と授業を続ける先生も少なからずいらっしやる。（先生紹介のようにもなってしまったが。）

当の授業を受ける生徒の側はどうだろうか。例えば現国など。自分の意見などは本来なら自ら挙手して発表してもよさそうなものがある。しかし悲しいことに受験戦争の中ではこのようなことは握りつぶされている。一ページでも、一問でも速く進まねばならない。そんなのんびりしたことは言えないのである。

筆者自身もこんな偉そうなことを言える立場ではない。が時々こんなことでいいのだらうかと思ってしまう。自分の意見を発表し、他人の意見を聞き互いに理解を深める。知っている人はより深く、知らない人同士はそれなりに（大分古いな）それぞれ知りあえたら

なんで「てすと」ばかりあるの～ 悲痛の叫びでした

どんなに楽しいか、勉強だけではつかめないことだと思う。

随分と本題から離れ、かつ筆者自身も何を書いているのかつかめないというお粗末な文章ですがお許しください。

## 行事について

一年十一組 竹内 尚 寿

僕は一年の前期にホームルーム会長を務めた。その中で最もたいへんだった仕事は文化祭の準備である。入学して間もなく大手前高校の行事というものを知らない僕にとって、説明もなしにこうしろあしろと自治会から仕事をいつけられてもできないはずがない。だから幾度となく本部まで質問をしにいった。例えば文化祭の二部についてである。その時本部からは二部につかう曲をクラスで決めてこいということであった。そういわれても何のことかさっぱりわからないので二部というものが何であって、決めた曲をどのような使うのかということを質問しに行った。しかし適切な答えはなかった。本部役員に何人とも尋ねてみたが、ほとんどの人は担当外だの、そんなこと知らないだのといって応じてくれなかった。ただ一人応じてくれた会長さんもよくわかるようには説明してくれなかった。結局その仕事は実行されなかったのである。

最近になって会長さんの言いたかったことが少しはわかるようになった。それは多少なりとも大手前高校というものを知ってきたからで、何も知らない新人生に仕事を投げつけてもできるはずがない。

しかし、もしかすると役員自身もその内容をよくは理解していなかったのかも知れない。そうだとすればそれは最悪の状態である。どちらにせよ自治会と全校生徒とのつながりは、そうしたことでうすれ、自治会への無関心という事態を招いている。それは行事の意義をなくしていく最大の原因であると思う。現在の大手前高校の行事はただ存在しているだけというのは我々みんなの実感であろう。ここで必要なのはただ一つ大手前生が一体となって行事を計画し実行することである。そうすることが真に意義のある高校生活のもとになると思うのである。

## 友人について

二年六組 笑 喜 太 嬉

中学と高校との友人を比べて一般的（私の友人以外）に見て、そしてまた私の友人から見ても、少し述べてみようと思う。

まず一般的に見て（私が見ただけで、あてはまらない人がいるのはあたりまえである。）中学の時に比べて、あやふやなグループ化が多い。休み時間の退屈を紛らわし、食堂やトイレに一緒に行く相手の集まりにしか過ぎない様に思える。その上、気があう、あわない、という自分の好き嫌いを平気に態度で表し、厄介な事を避け自然に離れようとする。これを友人と言えるだろうか。

自分の友人から見ると、中学の時の友人二人を除けばほとんど変わりがない。二人とは特別仲がよかった理由でもなく、同じクラス

になったことが数回あっただけなのだ。一人は妹の様な存在であった。彼女が誤った道に進もうとした時私は必死に止めたことがあった。私が疲れた顔をしていると、真剣に「無理したらあかんで……」と言ってくれた。この間、彼女とバスの中で会った。月並みな話をして、別れる時彼女の目は「中学の時に戻りたいヨ……。」と言っていた。それでも、彼女の顔は笑っていた。もう一人は姉の様な存在であった。私の後ろにはいつも彼女が支えてくれた。私の力では何もできないことを彼女が後ろから押してくれて、何百倍の力になったのだ。ある日、彼女が高校をやめたと聞いて彼女のアルバイト先へ行った。彼女は私の顔を見たとき泣き出して「ごめん……。」と言った。いつも世話になってた彼女に何もしてあげられない無力さに私は泣きたくても泣けなかった。姉妹のいない私には、本当の姉妹の様であった彼女たち。高校に入って本当に私のために、私をおこしてくれる友人がいない今の私が成り立っているのは、心の中で彼女たちが支えてくれるからと思う。

## あくまでも個人的に

二年五組

倭

建

カルチャー・ショックという言葉がある。僕が初めてこの言葉の意味を実感したのが、高一の初めだった。

中学卒業のとき、僕は、周りの女子達が泣くのが不思議でたまらなかった。男にはわかるはずないさ、とも思ったが、どうせ卒業し

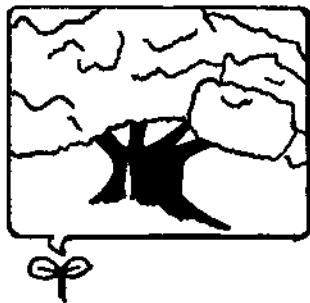
た所で友達付き合いがなくなるわけだし、何を泣いといねん、といささかあきれていたものだった。

ところが、である。高校に合格して、初めての授業の日、僕は思いつきりのショックを受けてしまった。まず、授業はさっぱりわからない、それよりも、否応なく「大手前生としての自覚」を持たせられることに、何でやねん、何でやねん、と必死で抵抗している自分がひどく惨めに見えて、どうしようもなくめげてしまった。

それからの数週間、僕はうつうつとして過ごしながら、何でこんな学校に入ってしまったか、と自問し続けた。そしてその頃は、周りの友達が信じられず、やたら昔の友達が恋しかった。

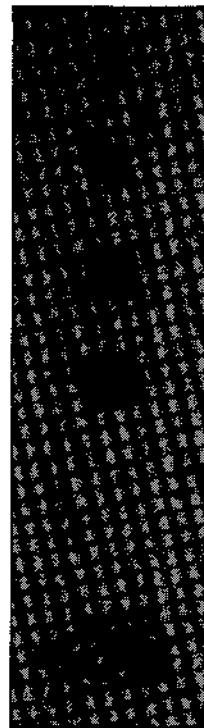
なんのことはない、僕は中学を本当には卒業していなかったのがある。そう気づいたのは夏休みの少し前だった。それに気づいた時卒業式で何故彼女らが泣いたかが、ほんの少しわかった。また、自分が何だからしく思え、力が抜けてしまうような気がしたのを覚えていた。力が抜けると同時に楽になった。そして、「自覚」は持たねばならない、と思い始めることができた。断じて、長いものには巻かれる主義ではない。一つ成長したのだ、と思っている。

今になってみれば、あのとき受けたショックが、カルチャー・ショックというもんだなあ、と思う。未だに毎日毎日、「お前さんらは自覚が足らんノ」と言われては、あのうつうつとした日々を思い出して、苦笑している。



友達の素晴らしさを、しみじみと感じる今日この頃です (劇軽童子)

## ★クラス★



## クラスの中の僕

三年 Pythagoras III

このような題で書いて欲しいと依頼されてはたと困ってしまったが、一旦引き受けたからには何とか書き上げてしまわなければならぬ。依頼主の趣旨にそぐわないかも知れないが、僕が体験してきた高校生活というものを、「クラスの中の僕」という形で書き綴ってみよう。

一年生、まだ中学校気分が抜け切れず、担任の先生からは「中学四年生」と言われていた頃、クラスの中は、「どの中学？」という質問と、新しい友人への期待で満ちあふれていた。僕も例にもれずに友人づくりをしていた。やはりこういったことは席が近い人とはど仲良くできるものらしい。隣のS君やY君、後のH君達と仲良くなった。授業・HR等を通じてやがて皆（といってもやはりクラスの、多くとも半分位）のことがわかりかけたところにコーラス大会・文化祭があり、これが実質的には本格的なクラスの交流を深める初めての行事となった。（なるほどその前に遠足・バレーボール大会

があるがどうしても「近所の仲間同士」のグループになってしまいがちであったように思う。）こんな時には意外な人物がリーダーシップをとったりするもので、僕と、比較のおとなしい（と少なくともその当時は思っていた）数人が中心となって準備をすすめて、一応の成功をなしとげた。このころからクラスの中にいくつかの仲良しグループが出来はじめたが、それぞれのグループが対立することもなく、和気あいあいとしたムードで三学期を迎えた。皆が皆、「クラス分けをしないで、このまま学年だけ変えてほしい。」と言うほど、この一年間というものの、このクラスというものが各々の心をとらえた。「クラスの中の僕」は僕だけではなく、クラス全員がそれになっていた。

やがて二年生になった。二年生のクラスでも、コーラス大会・修学旅行と、僕はこれまで中心的役割を果たした。成功した点もあれば失敗した点も大いにあっただろう。しかし、「クラスの中の僕」はできるだけだけの貢献をしたつもりであり、非難の声もあれば暖かい励ましの声もあり、名もあまり知られずに学年を終えるよりは目立った「クラスの中の僕」であってよかったと思う。やはり二年のクラスも解散してしまうことが惜しまれたが、新たなめぐり会ひのため三年生に。



三年生の「クラスの中の僕」は、結構目立っている。やはり今年もコーラス大会でクラスに協力したが、文化祭ではクラブの関係上、クラスの展示には協力できなかった。この時ほど「クラスの中の僕」

笑って卒業してください 笑顔のあなたが好きでした

の無力さを感じたことはなかった。しかし、その後、多方面でクラスに協力し、貢献しているつもりなので、それはそれでいいだろうと思う。

「クラスの中の僕」から見たクラスおよび学年、ひいては学校全体について触れたいと思う。まずクラス。どうしても進学、即ち大学受験ということが頭のどこかにあり、消極的になるのが三年生のクラスだと考えられている。なるほど一面にはそれもあるだろう。しかし、そのことは皆、顔に出さずになかなか活発に、積極的に行事に参加している。やはり、学校生活最後の「クラス」ということがある。それに三年生にはもうクラブ活動というものはないので、一・二年に比べて準備等の参加率も高い。しかし、どうしても今一步の所で息切れしてしまうのは、最初の理由があるからだろうか。

すべての行事を終えて、大部分の生徒が受験する共通一次も、もう目の前である。今、まわりを見渡せば、花も紅葉もなかりけり受験に染まりし大手前という感じだが、多くの人はあせりを感じて何をしたらよいのかわからないといった様子である。一・二年生に忠告。受験勉強は早目に始めなさい。色々先生方からの御注意にもかかわらずさわがしい学年であったことだろう。しかし、我々にとっては最高のクラスであり、最高の学年である。

学校全体を見渡して。全般的に言えることは、これは現代っ子の特徴でもあるが、「ヤル気」に欠ける面が多いと思う。「クラスの誰か」がやってくれるだろうと思っているのかしら、「よし、自分がやってやろう」という人が少ない様に思える。もっと各自が自覚をもって行動し、消極的にならない様にしてほしい。

結論。「クラスの中の僕」としては、納得のいく、充実した高校

生活を送れた。非難の声もあり、それへの同情の声もあった。目立ちたがりのアホやという声もあったが、「クラスの中の僕」は、少なくとも存在のないものではなかった。それで僕は満足している。皆も、程度はどうあれ、「クラスの中の自分」の存在を見つめ直して下さい。

依頼人の希望通りの原稿にはならなかっただろうが、それは僕の文才のなさだと思って下さい。

## 一人の自分

二年 DUSTCHUTE

新しいクラスが発表され、始業式の日、初顔合わせとなった。

ぼくは希望を持っていた。このクラスではみんなと打ち解けて楽しくやろう。一番遊べる二年生なのだからと。(先生は何と言われるか知らないけれど。)幸いと言うべきか、あまり知った顔はなかった。その方が都合がいい。何の抵抗もなく自分というものを印象づけられるからである。よい印象を与えようと考えていた。とは言っても、それぞれ知っている者同士二三人のグループになって話をしてるので、いきなりは入りにくい。去年、隣のクラスだった者が集まっているところに混ざることにした。去年、同じクラスだった者は、男子では一人しかいなかったから。周りを見回すと、なかなか賑やかだ。楽しいクラスになりそうだ。運動系クラブに入っている人が多いらしい。少しいやな予感がした。なぜなら、ぼくは文系系クラブに入っているのだ、あまり運動系クラブの者とは話題が合わないのである。希望通りにはいかないのではないだろうか。

一学期がスタートした。ぼくは相手さえ受け入れてくれるならば、うまく打ち解けていく自信があった。冷静にクラスを見回し、打ち解けやすいようなグループを探していた。しかし、やっぱり打ち解けにくい。そこで、友達の子達は皆友達とばかりに、一人に声を掛けられた。彼とは趣味も合い、まずクラスに友達を、一人確保するのに成功した。が、やはりその後は、冷静にクラスを見つめる日々が流れていった。

やがて、文化祭の日が近づいて来た。ぼくは今まで、あまり打ち解けた友達を持つことに成功していなかった。話をする者は数人いたのだが、まだあんまり打ち解けた感じはなかった。ぼくはクラスよりも、クラブを大切にしようになっていた。昼休みも、放課後も、授業が終わると、真っ先にクラブに出た。クラブの友達には気が合うし、クラスより、はるかに良かった。そして、クラスの中では、孤立しているような感覚に陥ることさえもあった。

しかし、更に文化祭が近づいた頃、ぼくはクラスの中で、数人の友達をつくることに成功した。文化祭での我クラスの出し物は、映画と決まった。これでは、クラブに出るから手伝えななどの理由で、反対する者もあったが、演劇よりはやり直しがきくということ、これに決まった。根っからの祭り好きのぼくは、黙っていられなくなり、映画という魅力にも魅かれて、大いに参加することにした。中心になって製作していくのは、出演者を含めて十数名、ぼくはクラブの合い間に、撮影などを手伝った。そうするうちに、シナリオを書いたKや、出演者のIやN、その他数名と話を



するようになった。そして、試写二日前となった。ぼくとK・IそしてSさんと編集をしたが、時間の都合で残りはKと二人でぼくの家で続けることになった。こうして、また一人Kという友達をもつことに成功したのである。

文化祭は惨々な結果に終わった。ぼくたちの努力は水に流れたのだ。ショックだった。協力者の少ない中、必死で作りあげたのに。ぼくはなおさら一緒に映画を作った者たちを身近に感じた。

夏休みになった。クラスの者たちとは完全に離れた生活が続いた。ぼくは毎日のようにクラブに出た。せめてクラブの友達だけでも大切にしなければ、と思ったから。

日は流れて二学期、水泳大会、体育大会となった。ぼくはいずれも単独で参加する種目を選んだ。リレーなどで自分のために負けるのはいやだったし、このころになって、なおさらクラスの中で孤立した感覚を覚えるようになっていたから。

修学旅行、ぼくは文化祭で友達になった者たちと行動班を組んだ。他の班の方が楽しそうではあったが、完全に、打ち解けることをあきらめていたぼくには、他の班に入る気はなかった。そうして、結局何の変化もないままに修学旅行は終わった。しかし、この修学旅行で大きな変化をとげた者がいた。彼はこの機会を大いに生かすことに成功し、そして多くの友達をつかんだのだ。

月日は流れ今日に至った。二学期も終わりに近づき、このクラスともあと数か月のつき合いとなった。しかし、今だにぼくはクラスに打ち解けられずにいる。そして、後悔の念にかられているのであ

今日、雨やからソフトボールできへんやんけ、腹立つなぁー(助動詞のテスト受からなかったアホ)

る。思い返してみれば、始業式が終わったその後、どうしてばくは話しかけようとしなかったのだろうか、そしてその後も、機会はいくらでもあったはずなのに、いい印象を与えようと思っても、自分がムツツリしていたのでは、できるはずもなかったのだ。ぼくは一種の被害妄想にとりつかれていたのだ。「どうせ話しかけても無視されるさ。」「話が合わないにきまっている。」などと考えて。でも、これは間違っていたのだ。現に、修学旅行を機にクラスにとけこんでいった者がいるではないか。

そんなことを考えているときに、ふともう一つの考えが頭をもたげてきた。それは、クラスから孤立していた自分をささえてきたものは何だったのだろうかということだ。そしてその答は、いうまでもなくクラブの友達であるという結論に達した。もしも、ぼくにクラブというものがなかったら、この何か月間、なんてつまらない学校生活を送っていたことであろうか。

今、自分をささえてくれたクラブの友達とわずかなクラスの友達に感謝すると共に、今度からは、大いに人に話しかけようと思ひ、そしてまた、こんな人間がクラスにいたことを知ってほしいと考えている自分がここにある。

## M君の教室

一年 ミスター・ちゃめっけ

大阪城、きれいな桜の花、古めかしい校舎、うぐいす張りの廊下、そして見知らぬ先生、同級生達。様々なものを目にしながら、M君は、どちらかと言えば期待よりも不安の方が強い心持ちで、一九八

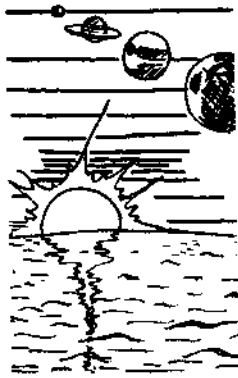
一年四月、大手前高校の一年二組の一員になっていました。見るもの触れるものの大半は、未知で、新鮮で、それだけに自分をとりまくそれらの環境に対するM君の不安感。そう、誰もが必ず経験したことのあるあの何とも言えない気分が、まさにその時彼を包んでいたのです。

彼は自分の座席から、周りの友達の顔をながめました。みんな緊張して、いくぶんこわばっているように見えました。じゃあ自分もそうなっているんだなとM君は思い、なるべくリラックスするように努めました。しかし、教室じゅうの重苦しい空気が、その時の一人の努力ぐらいで逆転するはずはありませんでした。こうして約一ヶ月が過ぎ、春の校外教授の日がやってきました。そのころまでには、もうだいぶM君達も積極的になっていましたが、これを境に、いっそう周りの者同士の理解が深まったように彼は感じました。それから中間考査が終わってバレーボール大会。あまり良い成績には終わらず、本気でおれが活躍してたら優勝やったのに、M君は他のクラスの友人に大会が終わってから言っていました。六月に入ってから、コーラス大会予選落ち、文化祭はなんと不出場と、バレーボールを含めてM君のクラスは一学期は低迷を続けていました。がいよいよ夏休み。長い休みをおもいきりエンジョイ!!——とはいえず、終始そういうわけにもいかなかったようです。M君は運動クラブをや、また他の生徒もやり、運動クラブに入っている二組の生徒はかなり多いように思われました。また文化系に入っている人もかなり多く、このクラスのほとんどの人は何らかのクラブに入っていました。

二学期に入ると、まずアチーブ、中間、そして期末と約ひと月

よつとの間隔で試験が行われましたが、このクラスの結果はあえて言わないことにします。水泳大会、体育大会、バスケットボールおよびハンドボール大会いずれの体育行事でも賞状をもらうことはできませんでした。十月末に行われた校外教授も、残念ながら、後になって晴れはしたもの、雨にあい、あまりおもしろくはありませんでした。しかし、友人達や先生と、いろいろな雑談を、いつもよりははるかに長い時間交わし、M君もそういう点では春の校外教授同様満足したのではないのでしょうか。

——そして今、——英語科の黒田先生の御担任の下、なんとかここまでやってきた二組ですが、M君はとにかくがむしゃらに走ってきた感じで、今立止まって考えてみると、いったい走ってきた沿道には何があったのか、よく覚えていません。M君は二組の一員となつてから今日までを、とても短かく感じているのです。それから考えます。二組とはどんなクラスだったのか。自分の存在はこのクラスにおいてどういう意味をなしたのか。まじめに考えます。答えは、——出ません。しかし一つだけはっきりとM君が認識したものがありませんでした。それは、クラスのことを省みようと思いついたことが大切だということです。M君は、今、大変感謝の気持ちに浸っています。



## ★クラブ★

### 柔の道

柔道部 宗田 柄老

みんな、柔道部にどんなイメージをもってるかな？

柔道って聞いたら、荒々しい、なんか男くさが特に漂うようなそんな感じせえへん？「キャー、柔道部ってくさいんちゃう」こんなこという女子もおるやろ。僕はね、柔道にはロマンを感じますね、男のロマンを。けどね、勝手なもんね、自分が実際にやってみると、もちろん感じませんわ。テレビなんかで柔道の試合見てたりすると、「んー男やな」と思いますけどね。自分がやってみるとは「男も何もないで」って思ってた、けどまた試合見ると「やっぱりロマンやで」けどまた「ロマン？ ロマンどっか行つた」ってこんな調子ですわ。まあ柔道に限らず、スポーツに限らず、何にでもロマンはあると思います。

まあ、僕（たぶんみんな）にとって、柔道やってていやあーなのが、冬場ですね、また特に寒稽古。これはつらいですよ。まだ暗いうちに家を出て、まだ薄暗いうちに練習が始まるんです。何といつてもこの練習の始まる前。あんな薄っぺらい道着を着て、素足で冷たい畳の上を歩く、これはたまりません。足の指がカチンコチンになって、受身したら体中がしびれるような感じになりますよ。でも、練習が始まると、そこは体のふれあいですから、すぐに汗が出てき

はやくクラブになりたい！（ある同好会）

ます。

柔道やってるとね、絶対、根性つくと思います。相手と自分との根性の比べ合いですわ。自分が苦しい、つらい、と思ってる時は絶対相手も同じくらいそんな気持ちになってるんです。だから、本当に辛抱のスポーツやと思います。だから寝技なんかで負けたりしたら根性で負けたくて思います。

柔道やっててね、僕、強く思ったことあるんです。ある二人が試合するでしょ、練習量では二人の間に歴然たる差があるんです。けど、より苦しい思いをして、辛抱してきた者が絶対勝つとは限らないんです。才能が、量に勝つことも多いんです。そしたらね、がんばって辛抱してきた者は、勝つことが全てであつたとすると今までの努力は本当に何にもならなかったということになるでしょ。井上靖は柔道やってたことがあるそうです。そしてこう言ってるんです。「明けても暮れても、柔道、柔道で過した。しかし、結局優勝できなかったし、練習量がすべてを決定するという柔道もなかった。しかし、私は一生、高校三年間の柔道生活に支配されている。全力を投入しても、事の成否はまた別であるということ。」井上靖はこのような考え方を青春から貰ったとも言ってます。

(俺、何か青春からもろてることあるかな?) 今はないけど、これからもろていけるもんね。けど、青春、って言葉聞いたら、胸がときめくわあ、この頃、特に思う。(ああ、俺らはまだ若いねんなあ) って。飛び出せ青春とか、われら青春とか、こういう言葉がこの頃は、耳に入って胸までくるわ。



とかなんとか言うて柔道から話がずれたけど、この柔道を愛する？人間がこの大手前にも存在してあるんです。仏の河崎六段監督、鬼の吉の田主将をはじめとし、その後に、男らしくて、やさしくて力もちの三十人余りの男どもがひかえとります。そして、この男たちは、はるか彼方の星の、そのまたむこうで笑っている、あの山下泰裕をめざして、和氣藹々と、そしてきびしく、稽古に励んでおります。

## 苦しみそして喜び

水泳部 岡田雅之

僕らの入学した年は、新体育館建設のためにプールが使えないということでした。そして今年も又、浄化装置の置き換え工事のためプールが使えるようになるのが一か月ぐらいおくれました。その二年間を僕は活動してきたのです。

まず昨年のことになりますが、とにかく「プールが使えない」ということが一番の問題でした。先輩方は「泳げない」と言うことで新入部員はいないだろうと予想されていたそうですが、どうしても泳ぎたいという我々九人(当時)が集まったわけです。心配と言えば他にもたくさんありまして、年間に数少ない試合をどうして乗り越えるか、合宿はどうするかなどでした。しかし顧問の先生や先輩方の努力により、なんとか三コースだけ使えるように許可をもらいました。このときの喜びは口では言い表せないものがありました。覚えている人も多いと思いますが、四方を金属の壁に囲まれ、プールといえば、六コース側には新体育館の足場が立っていたので、五コースと六コースの間にコースロープをはり、それにネットをつけ

私、大きくなったら、オーストラリア行ってヒツジさわるねん

て中に入れないようにして、一三コースで泳いでいました。そしてとにかく完全に泳げるようになったのは、六月二六日からでした。これは普通四月の末ぐらいから泳ぐので二カ月遅れたわけです。しかし年間第一回目の対校試合である四校戦（市岡・旭・清水谷・大手前）は、六月二一日に終わっていたのです。これから始まるプールでの練習は二か月もおくれたこともあり大変なものになりました。普通の年であっても、泳げるシーズンが短いので「あせり」はあるが、それに加えて練習の少なさから来る自分のタイムののびに関する「悩み」が加わりますます苦しくなってくるのです。そして何よりもせまり来る合宿のための強化練習は僕らには耐えがたいものがありました。例えば（他の学校の水泳部にくらべると少ないかもしれないが）朝、服部プールで水泳訓練があり、そのまますぐに学校へ帰って来て六〇〇メートルぐらいのインターバルです。これは確かに疲れますが、その後に残る充実した気持ちの中には水泳でなければ味わえないようなものがあるように思います。（僕は、水泳は水中という他のスポーツにはない条件の中で全身運動をし、呼吸の制限などもあるので他のスポーツに比べると疲労のしかたがちがうかもしれない、ということと何よりも泳ぎまくった、という満足感からではないかと思う。）そして始まった合宿、さすがに練習不足の所も多くて、故障して最後まで泳ぎきれなかった者も多かったようです。又、プールの状態はどうかと言うと、普段使っていない六コースにコケや藻みtainなものが生えて、それが他のコースに流れ出てくるので視界がわるく、ど



こかの池で泳いでいるような感じでした。今はもう引退していますが、このクラブを通してふり返ってみて、得た所は十分に大きいと思う。又、友情と言うものも十分に感じる事ができたと思って疑わない。なぜこれほど苦しい思いをしてまで自分は泳がなければならぬのか、ということはまだはっきり分らない（永遠に分らないかもしれない）が、ただそこにはある目標があり、何にも置き換えることのできない満足感に似たようなものがあるのではないか、と語っている。泳げない人や、泳ぐのがあまり好きでない人も多いと思うが、是非挑戦してもらいたいスポーツである。

## 私の「一枚の絵」

美術部

A・H

さあ、そろそろ終わろうかな……。イーゼルをたたみ、椅子を片づけ、絵の具箱を棚に置く。そして、三号の絵を持って、美術室を出る。――入部して約八ヶ月。この絵は、入部してから描いた油絵の、第三作目である。それにしても……作品数が少ないなあ――。十号、五十号、そして描きかけの三号。しかし、たったこれっぽっちしかないが、そしてどれも満足出来るシロモノではないが、しんどい目をして描いた作品だ。好い加減に扱えない。

一番思い出深い作品は五十号。五十号大のベニヤ板の四辺に角材を取り着け、表にファンデーションを塗ったものを皆で作り、それがキャンバスである。これは、高校展に出品する為の作品用である。高校展とは、大阪府下の高校の美術クラブが集まって、天王寺美術

館で作品を展示する行事で、油絵、デザイン、彫刻、焼き物等々が学校ごとに展示される。(無料で見れますので、皆さん是非見に行ってください。)油絵の出品は、最低で五十号なのだが、今まで十号や六号等しか描いた事がない私にとって、あまりにも大き過ぎた。一体、何を描こうか……。なかなか思い浮かばず、そのうちに夏休みに入ってしまった。

ある日、机の中を整理していると、中学の頃に家庭科の宿題で写した、幼児の写真がぞろぞろ出てきた。その内の一枚が、とても気に入った。二、三才程の女の子で、頭にはつばの広い、ごてごて花を付けた帽子、ピンクのエプロンドレス、ちっちゃいサンダルといった格好。両手でスカートをつまみ、数歩先には赤い眼をした一羽の鳩。ああ、これを描いてみよう。翌日から、朝九時から夕方四時まで学校に通い、五十号に取り組んだ。

まず、下絵を描いた。鳩の様子が写真だけでは分からず、大阪城公園に行ってポップコーンを買ひ、鳩を集めてデッサンした。が、なかなか思い通りに進まなかった。バックの色にも悩まされた。ページュは、幼児の手足と見分けられなくなったから、紺は少々強過ぎたから……。等と塗っては削り、塗っては削った結果(クラブの絵の具の大半を使ってしまった。)ピンク色に決めた。他に、子供の手足の肉付き具合、表情、胸の感じ等々、数えればきりが無い。時には絵を描くのがうっとうしくなり、図書室で本を読んでいた事もした。絵が思う通りに描けないというのは、私にとって、非常に気が重かった。描いて、やり直してみたら始めの方が良かった事もしばしば。絵の具の調合が異なって別の色を塗ってしまった……。八月三十一日の締め切りには何とか出来たものの、最初の夢とはかけ

離れた作品となった。鳩が貧弱、遠近感がなっていない(わっ致命的)子供の体格がアンバランス……。等と指摘された。だが、高校展に出させてもらった。

日曜日に天王寺に寄り、高校展を見てびっくりした。どの高校のもすごい迫力。描き込みまくって、重量感がある。構図の大胆さ、色彩の鮮やかさ、タッチの鋭さ等から、これらを自分と同じくらいの人が描いたとは、とても信じられなかった。大手前高校の、特に自分の作品の、なんて貧弱なコト……。!!大部さばったからなあ、と反省した。が、好い経験だった。そして、今度こそは……と思った。今度こそは……の三号、さてどんな出来になる事やら。——キャンパスの中で、「私」が笑っていた。



## 理研体験談?!

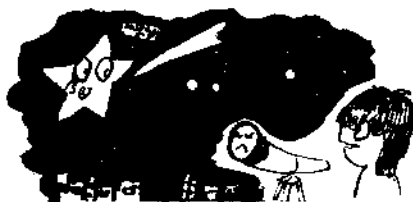
理化学研究部 Shooting Star

筆者とその親友N嬢が理化学研究部、通称理研の門(化学実験室のどこに門があるんだ!)をくぐったのは、一九八〇年の夏、そろそろ一学期末考査一週間前に差しかかるという頃。これがその後二人の運命を大きく狂わせるようになるうとは、どうして予測できたであろうか。二人とも、何かクラブに入ろうとは考えていたが、特に理研に入ろうという気はなく、ほんの少しの科学に対する興味と、わずかばかりの好奇心が手伝って、「今日は見学だけにしよう。」

ということにして、理研に足を踏み入れたのだ。部長なる人に説明を聞くことはんの数分。天文、化学、物理の三つの班があつて、天文班は昼休み黒点観測をやつてゐる。筆者とN嬢が入部するか否か悩むこと、これまたほんの数分。見学だけという決心はどこへやら、あっさりと名簿に名を連ねてしまった。しかも、まだ夏休みの合宿の申し込みが間に合うと言われ、どんな活動をやっているのかもわからぬうちに、やはり好奇心から申し込んでしまった。(なんといい加減な性格！)

さて、実際に二人がクラブ活動に参加し始めたのは、期末考査が終わってからのこと。さすがに最初のころは馴染めなかったが、そこは適応能力の早さで、一週間もするとかなり馴れてきた。しかし、ほんとに筆者をクラブに解けてましてくれたのは、合宿であつたと思う。この合宿は、ペルセウス座流星群観測を目的としたものであつたが、部員は所属する班に関係なく参加。(その時は筆者もN嬢も無所属。)流星群などといわれてももう一つピンとこなかったが、この三泊四日の合宿で、すっかり流星の魅力に取りつかれてしまった。無論、その後文句なしに天文班に入った。また、理研が非常に筆者の性格に合ったクラブであることを痛感したのも、この合宿があつたからこそである。

その後、文化系クラブ発表会や、今年(一九八一年)に入つてからの、半影月食やいくつかの流星群の観測を重ねるうちに、理研の存在というのが筆者の中でだんだんと大きくなり、再び合宿を迎え



る頃には、強力接着剤でくっ付けられたように、理研は筆者とは切っても切れぬ間柄となつてしまつた。

このクラブに入つて筆者の得ることのできたもの。それは天文に関する深い知識と言いたいところであるが、そんなことを言うとな魔様に舌を抜かれる。実際、星座をいくつか新しく覚えた程度なのだから。しかし筆者はここで最高のものを得ることができたと思う。それは素晴らしい仲間。(そう思っているのは筆者だけであらうか。)皆それぞれに個性豊かで、いろいろな性格の人がいるけれどなぜか気があつてしまふ。筆者にとって、学校の中で最も安らげる場所なのである。運動部のように根性や精神力を養うなんてことはできなかったけど、今、理研に入つたことを全く後悔していないどころか、楽しい学校生活を送らしてくれた仲間達に、たいへん感謝している。

もう筆者たち二年も引退。無性に寂しさを感じるが、もう先のことをしっかり考えなければならぬ時期である。理研は安らげる場所であるけれど、そこに止まっていられない。仲間達と共にそろそろ果立っていくときだろうか。

最後に一言、後輩がんばれ。

## 放課後下校クラブ

高橋 祐美

高校に入学したら、運動系のクラブにはいつて、青春を謳歌しよう。大手前に入学する前に、こう決心したのを覚えている。今でもほんの少しだが、そう思っている。だが、現在、私は、どの運

動系クラブにも所属していない。それどころか、どのクラブにも所属していないのだ。強いていうなら、「放課後下校クラブ」に所属しているのだ。

友人からの勧誘もあったし、私自身、入るつもりでいたのに、気がついたら、無所属の身。今からして思えば、入学前に具体的にクラブについて決めていなかったのがいけなかったのであろう。入学したら、ああ、あれもいい、これもいいで、目移りしてしまい、結局どれにも決められなかったのだ。だが、理由は、これだけではないだろう。私は自分の体力に自信がなかった。中学時代、バドミントン部に所属していたが、私にとって、クラブでの練習は、けっこうきつかったのである。バドミントンでは、コートの中を、あっちこっち走りまわらなければならないのだ。そのためにやらされたマラソンのどんなにいやだったことか！今、思い出しても、身ぶるいするくらいである。

そんな理由もあったか、クラブ決定はズルズルとのびてしまい、あつという間に、一学期終了。もうこうなつては、そうやすやすと入れない。同じ一年生でも、クラブの中では、差がついてしまう。

もうクラブに入るのはあきらめよう！そう思ったのは、二学期の始め、九月のことだった。それから後も、友人の勧誘はあつたし、気持ちよさそうに汗を流すクラスメイトを見ては、何だか寂しい気持ちになったが、それもしばらくすると、慣れてしまった。クラブに入っていないなくても、私にとって高校生活は、それなりに忙しいものだったのである。

クラブに入って、いろんな人と知りあうのはいいことだろう。どんなに苦しい練習も、後になればいい思い出になるし、一つの自信

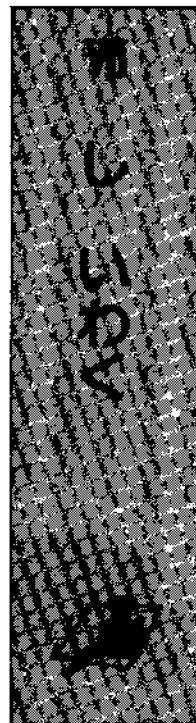
になるかもしれない。でも、「放課後下校クラブ」にもいいところはあるのだ。時間の制約がない。先輩、後輩のあいさつもいらぬ。疲れない。気楽にのんびり、自分の時間を楽しめる。私は、そういう時間を過ごすのが、わりと好きなのである。他の部員たちも、そう思っているのではないだろうか。ただ、時間の制約がないという利点があるので、部員（私だけかもしれないが……）は、しばしば、他のクラブ員（私の友人だけかもしれないが……）のいやみをきかなければならない。だが、試合に勝ったうれしさなどは、放課後下校クラブでは味わえないのだから、時間の制約がないという利点ぐらゐは、認めてくれてもいいと思うのだ。

ここまで、いろいろと書いてきたが、自己弁護のような気がする。あいさつが面倒でも、先輩と知りあいたかった。いい先輩と知りあったなら、あいさつが面倒だなどと、思わなくなるのかもしれない。時間の制約など感じさせない何かが、クラブ活動の中には、あるのかもしれない。しかし、こう考えてみると、クラブというもののほど、やっかいで、また魅力的なものはないように思う。いつのまにか、「放課後下校クラブ」に入っていた私だが、その居心地の良さを十分知っている私だが……今、やはりこう思うのである。

ああ！クラブに入りたかった！



A-H



## 昔の私と今の私

山田郁生 校長先生

編集子の御要望は、筆者にその生い立ち経歴を語り、今日に及んで大手前親にも触れよとのことである。紙幅から申しても欲の深いお求めである。つけるべき題に悩んだすえ、標記のようにした。こうしておけばいくらかでも語り易いと思ったからである。

さて、私は小学校五年生まで松江で育った。山紫水明のこの城下町で生れたのである。ロンドン軍縮会議の全権、総理大臣若槻禮次郎や、オリンピック委員で有名だった岸法学博士は、この雑賀小学校の大先輩で、この方々に因んだ基金から、学年末の終業式に何名かの者に賞品が出た。私も何回か頂戴していた手前、立派な人になることを自他に誓っていた。しかし、鼻ひげを生やし、ニコリとせず、底光りする眼で見据えておられる勝部織市という小柄な校長先生からこの賞状と賞品を頂くときは、何となく、それほどでもない自分の心底を見抜かれているようで怖かった。

五年生の終り、父親の京城への転勤にともない、まだ残雪が山々に消えやらぬ懐かしい彼の地を去った。駅頭を埋めた大勢の見送人の中に、担任の山野正雄先生に引卒された有志十数名の級友がいた。お互いに目をうるませて、「ぢゃあナノ」「うんノ」としか交わす

言葉もなかった。当時の山陰線の汽車は鈍行で、ゴトンゴトンとゆっくり穴道湖畔を走った。やがて白波の砕け散る日本海が見え始める頃になったが、こみ上げたままの私の気持は、いかに母になぐさめられても容易にはゆるもうとしなかった。私は今でもよくあの時のことを思い出す。そして色々な意味での人生や人間の原点を、あの瞬間に見ていたようにさえ思う。それは、別離、友愛、期待、愛惜、決意、いろいろなものがつき混って強く光った一瞬であったように思う。新しく住むことになった京城の地は、峨峨たる岩山が北面にそびえ、大河漢江が南に洋々と流れ、洋風建築の多いエキゾチックな街で、何となく松江にくらべてなじみ難く思っている中に、とうとう当地の京城帝大物理学科に進学するまでになった。しかし人生とは分らぬものだ。そして歴史はもっと分らぬ。大学の途中で昭和二十年八月十五日。未曾有の日本敗戦を迎えた。苦勞してリュック一つで本籍地佐賀へ引揚げた。年を置いて家族の生活の目途が多少ついてから大阪大学へ入った。そのおかげで、想像もしていなかった、それまで全く縁のなかったこの大阪と、こんなに深い御縁が出来て今日に到っている。

今、私は校長ト一年目にかかり、三つ目の高校がこの大手前である。私の年齢からみて、ここが私の教育者として骨を埋める最終校となるであろう。にもかかわらず私は忙しさのあまり、生徒諸君はもとより先生方とも接触する機会が極めて少ない。これが私の悩みである。私は校長会の会長のほか、東京での役も含めると三十を越える役を貰っている。それこそ大変などと言ったものではない。身も心もアタマも余程強くしておかないとくたばってしまう。さきに「こんなに深い御縁」と言ったが、その実感はこんなところからも

出ているに違いない。

諸君は、私と違って滅法に若い。いくらでも無理がきく。それに人生で最も可塑性のある年代にある。にもかかわらず、未だ十分に力を可動させていないのではないか。かつて新聞部のインタビュでそのことを話したら、「勉強不足か?」——校長先生に聞く——とタイトルに出た。「?」はよいが「!」はいただけない。勉強とは感嘆するいとまもなく、自らに強いて勉めている状態を言うからだ。人生には、そんな時代とそのような場面が必要である。私について申せば、そんな時代はもはや過ぎた。しかしそのような場面なら今でも、と言うよりは今だからこそ、しばしばある。そしてそれは人間の生きがいである。充実した人生とは、何時それが断たれても、その時まで生きがいを感じて生きてきた人生のことだ。私は諸君に、そのような生き方を望む。下世話に「雀百まで踊り忘れぬ」という。又「梅檀は双葉より芳し」との諺もある。人間の性格が変らぬように、若い時代の生活態度は、長じた後も潜伏しているものだ。今私の手元に貴重な一枚の紙片がある。私の小学校一年時の児童観察票で、亡き母が京城引揚げの時も肌身につけて持ち帰り保存してくれていたものである。そこには、神戸キクという担任の女先生の克明で美しいペン文字が、すでに色あせたとはいえ明瞭に読まれるが、驚くべし、そこで描出されている「私」は、今の私と寸分変らぬ。私の長い人生経験の中で自ら省みてそう思い、又他人から見てそう思われていると私が思っていることが、そっくりそこに示されている。当時二十歳そこそこであられたであろう担任神戸キク先生の御観察に私は心から敬意を表するものである。と同時に、昔の私は今の私と変らぬが、今の私は半世紀も前の昔の私とは、すっ

かり変っているとも言えることに着目したい。それは単に子供から大人へといった発達過程における変容ではない。自己の深層に潜伏しているものを克服したり、自覚された長短を転化させたり、助長させたり、の努力過程における成果である。つまり勉強の結果である。人生とは人間形成の過程である。そして、それには勉強が不可欠なのである。

すでに紙幅もつきた。最後にもう一度諸君よノ立派な人生を歩むべく勉強を続けよノ私は心からそれを祈る。

## 読書とは

松井 慶子 先生

私が大手前高校図書館の助手として勤め、早くも八年が過ぎ去りました。その中で感じたことといえば、寂しいことですが、年々、図書館を利用して生徒の数が減ってきている、ということでした。放課後の図書館は暇です。昼休みならまだいざ知らず、四時を過ぎると、もう人影もまばらで、そしてその中でも、本を貸りる為に入館する人は、せいぜい二、三人、一日の平均帯出冊数は五冊あればいいほうです。しかし、本を読まなくなったのは本校だけではなく、公共図書館、また他校においても、一般的に利用者が少なくなっているようです。それは本に接する機会が少なく、読書の楽しさを味わえなくなっているからではないでしょうか。良書は、読者がそれなりに理解するにはかなりの時間が必要ですし、また現代

では黙って見てだけで展開されていくテレビという便利な物の影響が、かなりあるように思われます。

私は、今一度読書というものを考えてみました。読書の目的は各個人によってさまざまですが、しかし「読書をすることは良いことなのか。」と問われれば、誰だって「良いことだ。」と答えるでしょう。だからといって、どんな本でも数多く読みさえすればいいというものでは決していない。やはり読み方があるように思われます。

それぞれの年齢によって興味の方向が違い、自分の成長の軌跡を見るようです。そして読書の傾向が、自分の考え方、ひいては、生き方にも反映しているのだと改めて思い知らされます。若くて十分な理解力や批判力がなく、又幅広く読書する余裕がない者にとっては、注意すべき場合だっております。一冊の本が、その人の考え方や生き方を、大きく変えてしまう程の影響をあたえるということも、読書のおもしろさ、いや大きな魅力ではないでしょうか。

一つの作品の中に、かけがえのない人生がくり広げられ、我々が日常生活の中で、埋没し、見落としがちな問題が提示され、その人生の問いを、我々が考え続けていく過程をもつことにおいて、自己の思想を耕し、人間性を豊かなものにして行くのだと思われれます。だから人生の中で、読書のもつ意義はたいへん大きいのです。

私がこのようなことにきづいたのは、恥かしいことですが、まだ最近です。しかし社会人となってしまおうとしても職務上、いくら読みたい本が机の上にならべられていても、努力しないとかなかなか落ちついて読書に親しめませんし、時間ももてません。だから学生時代に多くの本を読んでおけばと……

高校生活は、社会生活の方向を決定するいわば準備期、その時

そ勉強に追われ余裕がなくても、忙しい合間を少しでも引き裂いて、実施勉強と精神の勉強をしてみてもどうでしょうか。本とにらめっこすれば、また違った展開に魅力を感じ、「あなたの生き方」に出合うことになるかもしれません。

本校には、よい図書館があるので、大いに活用してほしいと思っています。

## 学問の精神を養うということ

多賀谷 疆 先生

あたえられた題は、「数学を通してみる大手前の生徒」ということでした。僕はそのことより「数学を通してみる学問の世界」という主題を語りたいと思います。話が少々固苦しくなるかも知れませんが、しんぼうして読んで下さい。

明治のはじめ、日本に招かれたドイツの医学者にベルツという人がいます。有名なベルツ水はこの人の処方による皮膚薬ですが、彼は明治三十五年に、来日二十五周年の祝賀会で、「学問を生まんと欲すれば、すべからず学問の精神を養わねばならぬ。」ということを強調しました。ヨーロッパに追いつけ、ヨーロッパを追い越せと日本中がわき立っている当時に、これは日本への貴重な忠告であったと思います。明治の評価はいろいろですが、僕はその進取的精神を高く評価しています。しかしその後、大正・昭和と続いて、ついに太平洋戦争という日本史上最悪の悲惨な結末をみるに至るまで、

日本人はベルツの言葉のほんとうの意味を考えずに進んでいったのではないか、学問の精神を養うことを忘れていた点だけに限って言えば、あの明治の躍進は日本の現代に不幸な結果をもたらしたのではないかと考えるのです。

いま頃こんな古くさいことを持ちだしてと思う諸君も多いでしょう。古い話のついでに、太平洋戦争の敗色が濃くなった一九四三年に、海軍大学校長であった及川古志郎大將は、高山岩男博士に「日本海軍は歴史を学ぶことを忘れていた。」という悲痛な述懐をもらしました。技術的にはヨーロッパを追い越した零戦・超戦艦大和、武蔵を造りながら、「歴史を学ぶ」ことを忘れていたために、今日の結果を招いたというのです。ベルツが説いた「学問の精神を養う」ことと、「歴史を学ぶ」ことは同義だと僕は思います。

学問を学ぶなどというと、君達は大学の奥深い研究室でやっていることだとも知れませんが、それは誤解で、小学校で勉強する算数も、中学校・高等学校で学ぶ数学も、数学という学問を学ぶことにかわりありません。内容に難易があっても、学問の精神を養うことに関しては小学校も大学院もみな同じだと僕は思うのです。

学問を学ぶ方法は、大きくわけて三つの要素から成りたっています。第一によく知ること、第二に習熟すること、第三に学問の精神を養うことです。第一、第二の要素すら思うに任せぬ高校生が多い時代に、第三の要素などお門違いだと思ふ人があるかも知れませんが、実は第三の要素の必要さがほんとうに理解されていないと、第一、第二の要素に熱が入らないし、長続きしません。それからもう一つ大切なのは、初めの二つは他動的に、あるいは強制的に身につけることができるでしょうが、第三の要素は、自発的に学問に向

てゆくのでなければ、絶対にわがものとならないことです。君達高校生こそ、学問の精神を養う重要さをわかってほしいのです。

学問の精神を養うということは、学問の精神を知ろうと努力することだと僕は考えます。えらそうに言うが、おまえは数学の精神がわかっているのかときかれたら、多分僕は答えられないでしょう。

「調和」だとか「論理の究極の尊厳」だとか、空虚な言葉は知っています。しかしそれらを実際に経験して言うのでなければ、他人の言葉であって僕の言葉ではありません。ベルツが強調したかったのは、学問の精神を知ろうと努力することが、学問の精神を養うことであって、その過程において、学問の精神は向うの方から立ちあらわれてくるのだと僕は信じています。

よく世間に「一たす一は二ではない。」とか「数学なんか勉強して何の役に立つか。」とかいう人がいます。僕は「一たす一は二ではない。」といえるのは「一たす一は二である。」ことがほんとうにわかった人だけで、「一たす一は二である。」ことを認めなければ、世俗の論理といえども成り立たないと思います。僅かの例外は、ほとんど確かなこの真理を究めた者だけが気づくことです。何のために数学を勉強するかも同じく、役に立つ、立たないは勉強の過程で答えられるもので、真剣に勉強すれば役に立つ、立たないはもはや答える必要がなくなります。

よく知ること、よく習熟すること、学問の精神を養うこと、この三つをしっかり擲んでこれからの人生を歩めば、どの方面に進むにせよ、君達はいつもあふれる泉を自分の心の中に持つことになりま

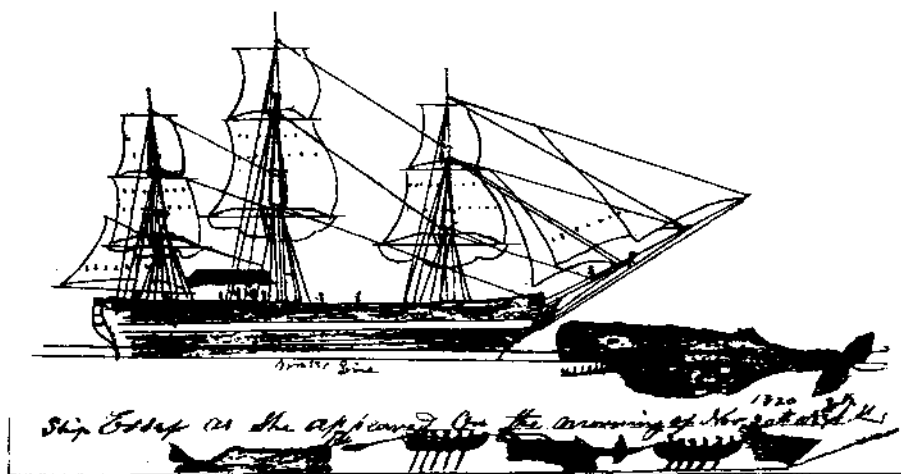
す。人生の幸福とは、実はそのことをいうのだと、僕は考えるので

# 「白鯨」余聞 タマス・ニッカソンの日記から

浜田 一郎 先生

マサチューラ島は南米チリ沖ファンネルナンデス諸島に属する無人島である。この島に置き去りにされ五年後の一七〇九年に救出されたスコットランドの水夫セルカークの物語をモデルにして、作家デフォーはあのロビンソン・クルーソーを創造した。そして一八五一年アメリカの作家メルヴィルは、中部太平洋で巨大な抹香鯨に襲われて転覆したエセックス号遭難事件にヒントを得て名作「白鯨」を著したと言われている。この捕鯨船エセックス号に乗船していた十六歳の見習船員タマス・ニッカソンの日記が、昨春偶然の事からコネチカットのある家のアチックで発見され、捕鯨基地ナンタケットの博物館で確認をうけて話題を呼んだことがある。彼が綴った日記の一部の抄訳を紹介してみよう。一八二〇年の出来事である。

十一月二十日、舵をとっていると風上側から巨大な鯨が接近してくる。航海士の命令通りに上手舵一ぱいにしたが間に合わず、鯨は轟音と共に左舷前鎖の真下の水際に大きな頭をぶつけた。足下が激しく揺らぐ。鯨は船底を潜り抜け右舷に姿を現わした。この時鉆を投げれば殺せただろうが、鯨が尾を一振りすれば舵は外れて航海不能は必至だ。航海士は思い止まった。まっすぐ三百ヤードばかり進んだ鯨は、急に引返し猛烈な速さで船に向って突進し、頭を船首に激突させて大きな穴をあけてしまった。浸水ノ浸水の声に、船に残った一隻のボートを下ろし終った時に帆柱は海面に姿を消そうとしていた。持出したのは、大砲二個、四分儀二台、航海提要二冊、



The 100-ft whaler Essex and assailant, sketched by Crewman Nickerson.

羅針盤二台だけ。船長は風下二マイルの海上で二隻のボートを指揮して捕鯨中、何か突風を受けて船が転覆したように見えたと言う。

引返してきた船長の命令で帆柱を根元から切ると船は四十五度の角度に戻った。食糧の大半は船底にあったので、取り出せたのは、二樽の堅パン・二頭の仔豚・六匹の食用亀だけだった。それでも満足して、守護し給う神に感謝をささげよう。

十一月二十四日、風が強くなった。長さ二十三フィートのボート三隻に二十名が分乗して漂流が始まっていた。午後一時大波が襲って来て私のボートは水びたし。

大事な堅パンが海水に浸ってしまった。前途を思つて一同暗然。この日、食糧と水の割当量を決定し分配してみた。堅パン一個と水一パイント、これが一人の一日分。

十二月十七日、三日前から無風状態。風の間は食糧割当は半分に削減された。しかし水の節約は不可能である。渇きのために唇は乾涸び熱を帯びてくる。海水で湿すと却って渇きと痛みを増すばかり。遂に自分の尿を飲む始末だった。

一月十九日、激しい雷雨。帆を水平に広げて雨水を貯えようと試みる。帆は打ちつける波に濡れ、折角の雨水も塩からく到底のどを通らなかった。

一月二十日、ニューヨーク出身の黒人ピーターソンが全身衰弱を訴える。彼は割当の食糧を辞退し、やがて苦悶することも無く死んでいった。六十歳。キリスト教徒として死んだと私は信じている。

二月十五日、ファンフェルナンデス諸島のマサチュエラ島から約三百マイル。一人に堅パン二個を分配して食糧は無くなってしまった。死が我々の頭上を覆っている。相談の結果、どんな苦境に陥っても、神の御心に委せて決して籤はひかぬと約束しあった。ただ、誰かが先に死んだ場合他の者が、自ら正しいと考えるならば、その遺骸で命を繋いでも構わないということにした。……

(一八二二年二月十七日、チリ沖四百五十マイルの海上でインディアン号により発見。二隻は救助されたが、残りの一隻は行方不明。ニッカソンの日記は続く。)

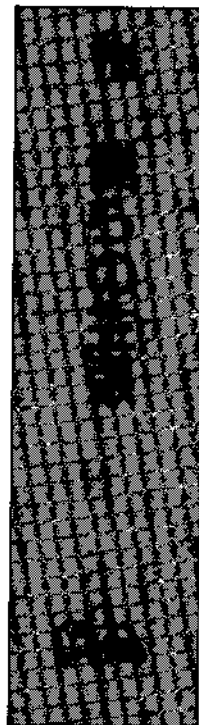
最後の食糧が無くなった時、ラムゼルが籤を引くことを提案した。ポラー船長は拒否したが、甥のオーウェンがこの提案に賛成。数枚の紙片を切って帽子の中に入れ籤をひくことに決った。皮肉にも

当り籤はオーウェンだった。船長は身代りを申し出たが、甥は公正なる籤に従うのだと言い張ってきかない。次は引金の引き手を決める籤だ。恐ろしい事が起った。船長が当たったのだ。彼は何度も繰返して辞退を懇願したが、結局従わねばならなかった。オーウェンは仲間を呼び集めて故郷の母親と家族達への別れの言葉を述べた後、暫らくの沈黙を与えてくれという。そして「籤は公正だった」と呟いた。……

船長は帰国すると、甥の望み通りに母親である自分の妹を訪ねておそろしい別れの言葉を伝えた。その時、彼女は狂わんばかりに悲しみ、その後は死ぬまで兄の顔をどうしても見る事が出来なかったと聞いている。……

ニッカソンの日記はここで終わっている。いま私の心の中に拡がるのは、十六歳の少年船員が目前に展開する極限状況をかくも冷静に観察しかくも正確に記述し続けることが出来たという事実が呼び起す感動である。メルヴィル自身、十八歳の時水夫になり二十五歳で放浪生活を打切る迄、捕鯨船に雇われては脱出して食人種の中に逃れるという生活の中で、地獄の諸相を見る機会があったに違いない。とすれば「白鯨」は不信心の罪で海中に投げ込まれ鯨の腹に吞まれたという旧約聖書のヨナの受難と同じく、人間の受難と宿命の話とみる事が出来る。この日記を読んで、「白鯨」を読みなおして見ようと思ったのは私ひとりではあるまい。





## 時間と人間

“いま”という時の流れの中で

二年六組 原 京子

時間は、いつできたのだろう。一説によるとビッグバンが起きてからだ、とか。しかし、そんなことはひとりの人間にとってあまり関係のないことなのかもしれない。

人は生まれ、生き、やがて死ぬ。つまりその人にとって時間とは自分が生まれたその時から始まり、自分の死とともに永遠に終わるところで、「いま」という時間は何なのだろうか？ 「いま」は瞬時に消え去り、また次の「いま」がやってくる。この時間の流れは永遠にとどまることを知らず、しかもいつも私たちは過去でなく未来でなく、「いま」の中にいる。

私たちは時間と共に流されているのであろうか？ そう考えざるを得ないほど、今の私の生活も環境も自分もあらゆるものの一切が時間と共に押し流され、変貌してゆく。時間が私たちに与える影響は計り知れないものがある。

古来、多くの人々が過去へ戻りたいとか、未来を知りたいと願った。タイムトラベルという夢もそうである。

しかし現実になんかということが可能なのだろうか？ 現段階では不

可能であることははっきりしている。だから、しょせん夢物語のとてしかありえないと思っていた。

ところがある日私は講演会へ出かけた。講師はかなりのご高齢であるように思われた。それもそのはず、その人は無重力が現実にあるのかどうか、ということとを大学で論議されていた頃、学生だったというのである。そして、その当時は理論上でなく、本当に無重力があるとはとても信じられなかったという。そして話がタイムトラベルのことに及び、その昔無重力の存在が信じられなかったように、今はまだタイムトラベルは信じられないかもしれないが、私は可能だと思ふ。時間はいつも一方にだけ流れ、決してその逆は起こらないのだから、という話をされた。

私はこの話に大いに興味をそられた。タイムトラベルが可能かもしれない。

そして今もそのことが頭の片隅にあって、「時間」というものを考えつづけている。しかし考えれば考えるほど、それは神秘的でつかみどころがなく、魔物のような存在である。いや、もし「時間」を人間が操ることができるようになれば、この世はどうなるかわからない。まさに時間は魔物だ。いくら考えても結論はでてこないのはわかっている。多くの先人たちは時間について考えてきた。考えは人によってさまざまだ。そしてその答えはまだ闇につつまれた状態だ。しかしつかは、人間



おい、自動販売機 はよ10円返さんかい！ (ブル)

がその答えを知ることができるようになるかもしれない。いや、果たしてその闇の彼方にその答えはあるのか？

時計は規則正しく時間を刻む。ある者にはゆっくり、ある者には早く感じられるけれど。この時計の刻む時間について考えるのはさほど難しいことではないように思われる。しかしこれはあくまでも人間のためのものであり、地球でしか通用しないものである。時間はどこでも一定の速さで流れているという保障はどこにもない。

この人間が定めた時間の世界から一步外に出ると、そこはもう、暗黒の宇宙である。人間の力はとても及ばない。

今、宇宙時代とかいわれて、宇宙開発が盛んである。宇宙船のことを英語でスペースシップという。しかしここで注意しなければならないのは、スペースであって、ユニバースでないことである。まだ人類は宇宙の海を航海するところまでいっていない。せいぜい波打ち際で遊んでいる程度なのである。

時間も宇宙もビッグバンで誕生した。そして気の遠くなるような長い時間が流れ、宇宙は膨張しつづけた。そして人間が生まれた。

いつ、どこで最初の人間が生まれたのか、それは定かではない。しかし今人間は自分を生んだ宇宙と時間について考えは始めている、とわかっていいだろう。私は、いつか人類が宇宙の海を航海し、タイムトラベルができる時代がくるかもしれないと想像する。

しかしそれは未来の話だ。現時点では、人間は「いま」という時の流れの中では、生きられない。しかし、「いま」が存在するた

めには、過去と未来が必要である。

過去からは知識と経験を、未来へは希望と目的をもって、人間は「いま」という時の流れの中に存在している、と言えるだろう。

## 結婚と人生

二年七組 若井敦子

私は形式化しつつある結婚から逃れたいと思っている。我々にとって、そして特に女性にとって大きな夢であり、一つの目標でもある結婚から逃れたいというのはおかしいことだ。だけれども思うに違いない。しかし、私がここで言いたいことは、あまりにも型通りで義務づけられているような現代の結婚から逃れたいということであって、結婚を全面的に否定するということではない。

では形式化されている現代の結婚とはどういうものなのか。少し具体例をあげてみる。

いつの時代においても結婚適齢期というものがあって、女性でも男性でもその年齢になると結婚するのが普通であると、世間一般では考えられている。そして当人たちがそのときが近づくにつれて妙なあせりを感じ始め、急いで相手を捜そうとする。そこで、要領のいい者はすぐに相手をみつければ、そうでない者は慌てて見合いをしてみたりして、結局別に好きでもないしきらいでもないという相手をみつめて満足することになる。たとえ結婚する前にはそれほど好きでなくとも、結婚してりっぱな家庭を築いていくことが夫婦間の愛情を深め、二人を硬い絆で結ぶのだという考えを信じて――。

また、結婚式にしても、式はキリスト教徒でもないのに教会で挙げ、披露宴では何メートルものウェディングケーキに、新郎新婦ともどもお色直し、そして、新婚旅行はハワイ。

そんなふうに主体性がなくワンパターンな結婚が私には我慢でき

ない。しかしなぜ私はそうまで固執してそのような結婚をいやがるのだろうか。

別にそれ相応の年になれば結婚すればよいのだし、一生に一度の（一生に二、三度の人もいるが）晴れ舞台なのだから、少しくらいはでにしてもよいのではないのだろうか。つまらない意地を張ったりしないで、素直にそれら世間一般の楽しみを味わえばよいのではないかと、ふと思ってみたりもする。しかし、それではどうしても納得できないものが私にはあるのである。それは私の結婚に対する不信任の原因があるように思われる。

中学生になって、社会に目を向けその真の姿を知ると私には男女の不平等性が目についてきた。そして特に結婚や仕事においてこの問題が大きく私の胸にのしかかってきたのである。

だれでも自分の人生をよりよく、自由に生きたいと願っている。私にしてもこれからの人生を自分の力で出来得る限り一杯、自由に生きていきたいと思うのである。しかし、結婚は女性がそんなふうに生きようとするときに、大きな障害となり得るものである。現代では法律で男女の平等が確定されているとはいっても、それはあくまでも法律の上でのことである。現実には結婚すれば女性は男性の姓を名乗って男性の家に入ることになる。そして、家庭に入ることに――。

もっとも、結婚してからでも社会に出て働こうとする女性が多い。しかし、そんな人たちでも職場と家庭の両立がうまくいかず挫折していく人が少なくない。それも家庭の仕事を女性と分け合おうとする男性が少ないためである。

だからといってなにも家庭の仕事がいけないというのではない。

家事や育児、家計のやりくりなど、何をとっても家庭の仕事はなくてはならない大事な仕事である。だからそれを専業としていても構わない。しかし、人にはそれぞれ道というものがある。のであって、ある人が好きでやっていることでも別の人はきらいかもしれないし、むいていないかもしれない。人に生き方を強制することはできないと私は思う。

家庭の仕事は大事だ。だからこそ夫婦が協力してやっていかなければならないのではないだろうか。

とはいっても社会のしくみがそうすぐに変わるわけではなく、いくら嘆いてみたところでどうにかなるものでもない。ただ、このままの気持ちで結婚しても幸せになれるかどうか疑問である。

そんな結婚に対する考え方が、私に形式をつくらうための結婚から逃れたいと思わせるのである。

ここまで考えが戻ってきて、それでは形式的でない結婚とはどういうものをいうのだろうかと考えてみたとき、私は結婚そのものに疑問を持ち出した。役所に結婚届を出そうと出すまいとよい家庭はできると思うのである。この考えでいけば結婚なんて必要ないかのようである。しかし実際にはそういうわけにはいかない。現代では何でも法的な位置づけが必要とされているし、今の社会では確かにそうでなければならぬだろうから。

しかし、だからといってまわりの言葉に流されて、考えもなく結婚するというのは馬鹿げていると思う。私が結婚そのものに疑いを持ったのもそのような形式化された習慣に従うことは本当に自分のしたいことを見失うことになると思うからである。多くの人は早く安定した位置につきたくて安易に妥協してしまうのだろうか。しかも、それなりに幸福に暮らしているのだから、それはそれでよいのかもしれない。

行事は多く先生に頼るのはいけない。もっと改善が必要だ

しかし私は、人は途中であきらめて妥協したり、自ら安易な道に進んだりしてはいけないと思う。苦しくても自分が決めた道を進めば、結果がどうであろうときつと満足できるものがあると思うのである。

## 一応高校生(未熟者めえ〜っ！)

一年十一組 剽 軽 童子

——一応高校生らしくなった。……と思う。——でも友達と言う「あんたは高校生に見えへん／中学一年生や。」ガーン／ショックは大きい。一体いつになったら高校生に見えるのだろうか、ほんの少し前までは、さほど気にもとめてなかったのだが、何故か最近、このままお婆ちゃんになったらどうしよう……と悩みだしたのである。(友曰く、「さぞかしかわいいお婆ちゃんになるだろう。」)でも、良く考えてみると大したことじゃないみたい。(友曰く、「つきあいきれんわ」)……私、天真爛漫な性格だと言われたことがあるけど、結局友達も、「つきあいきれんわ」と言いつつ、いつも私と行動を共にしてくれる。

友達ってそういうものなのでしょうかね？だとしたら、私は幸福だと思う。いつも何気なく教室でさわいでいるけれど、色々心配してくれたり、時には厳しく忠告してくれたり、色々励ましてくれたり……今までを振り返ってみると、友達の大切さが身にしみて、「ありがとう」の一言を贈りたい気分になる。しかし、私は友達に一体何をしてあげたのだろうか!?……頼りになる友人に、頼りっきりで、何一つしてあげられなかったのではないだろうか？何だか、申し

分けなくなる。この調子で自分を責め続けると自己嫌悪に陥る。だから過ぎたことは考えないことにした。つまり、明日からはもっと自分で気をつけて、友達に甘えず、自分で適切な判断をして、友達に負担をかけないようにしたいと思う。(決めたからには実行あるのみ！)

高校生らしくなったその日には、(何年先になるかはわからないが……)私はどんなふうに成長しているだろうか、そして友達もどんな風に成長しているだろうか……(ちょっと不安)

——あしからず——



## 音楽と社会

——音楽にできることはいったい何なんだ——

一年九組 岡 本 正 樹

今の日本の音楽状況、特にポピュラー・ミュージックの状況には、はっきり言ってうんざりしている。なんだいあのくだらねえ流行歌

『小さな恋のメロディ〜』のリバイバル、なんでやってくれへんのぉ〜?! (K・K)

は？「ぎんぎらぎんにさりげなく」何を言ってんだ、こねやろ／そんな歌をよくも正気で楽しめるもんだなあ、あきれてものも言えないよ、全く／これ以上言うとか、ふんから袋叩きにされそうなので、これ位でやめにしておこう。私は、こんな始ちゃんアイドルの全盛期は過ぎたと一時は思っていたのに。そして、形式化したおニューミュージック。若者の意識・思想に影響を与えたかつてのフオークはほとんど失なわれ、「ちたとぼく」の感傷だけに終始してしまふ、視野や世界の狭い歌がいかに増えたことか。タモリの言葉を借りると、「見せかけのやさしさ」である。それこそニューミュージックは、言葉を私情にまみれさせてみだりに使い過ぎる。全く人畜無害のおミュージック。ビッグアーティストと呼ばれる井上陽水や、特に吉田拓郎などは過去に築いた地位に安住して、いたいけな子供達をだまし続ける。彼らの歌は今や「表現」ではない。更に、イモな日本のロックバンドは、ロックの意味もわからずに、欧米コンプレックスから抜けきれないでいる。駄目だこりゃ。

④流行歌やニューミュージックやロックがすべて悪いわけではない(部分否定!?)

これは音楽の商業化に関係が深く、またファッション化であると言えると思う。それに、音楽のパワーが足りない感じがする。音と社会との必然性の欠如、すなわち、「かけがえのなさ」の欠如ではないのだろうか？

それでは、私は音楽に何を求めるのか。「これはただの音楽なんだから、楽しめりゃそれでいいんですよ、ハイ。誰にも文句なんてありゃしない。」なんてのじゃ駄目だと思う。「現状否定が、人を表現に向かわせる。」という言葉は何かで読んだことがある。すべ

ての表現がそうではないにしても、これは確かな事実である。音楽をこういう視点でとらえると、ただ「音が楽しい」だけでは私は満足できないのだ。それじゃあ、音楽は何様なんだい、と問われると、未熟な僕には説明できない。そこで、音楽の起源を調べることで何らかのCUEが得られるのではないかと思ひ、百科事典をひもといた。それによると、次のような学説がある。(1)言語抑揚説 (2)自然民族の感情高揚状態における言語が歌となった (3)集団労働の際のかけ声や何かを打ってリズムをとる行為が音楽となった (4)自然民族が大声で意志を伝達する時の老若男女の音高差が音程となり、歌となった (5) e i c i これから、私は何を学びとるか。まず、「音楽は社会を意識したもの」であるということだ。栗本慎一郎(経済人類学者)が坂本龍一のサウンドストリートに出た時、音楽は「挙動性のキャッチボール」だと言っていたが、それはこの言葉と関係がありそうだ。そして言語抑揚説、すなわち某ロック評論家の言葉を借りると「言語の意識的発声」が歌であるということにも興味を覚える。

この前、ラジオで黒人牧師の伝導の様子の録音を聞いた。牧師の声は感情の高まりでいつしか歌のような語りとなり、聴衆もそれに相づちを打つようにうたうのだ。形は単純であるが、音楽の役割を果たしている。また、テレビで見たことだが、渡辺貞夫がアフリカ旅行中、サックスの熱演で原住民と交歓する場面があった。音楽を超えたコミュニケーションができる音楽ってな

んですばらしいんだろう／このように、黒人社会やアフリカでは音楽は機能しているのである。社会とのかかわりによって、音楽は生きていくのだ。だから、音楽と社会との関係がわからない



ければ価値がわからない場合もあり得る。坂本氏の番組でのことだが、アフリカの民族音楽をかけ、彼は「このレコードの解説は音楽的技法のことばかりで、その社会に対する音楽の意義や、どんな時、どんな場面で歌われるのかについては全く述べられていないので駄目だ。」ということを書いていた。

先程から音楽の起源やアフリカの話ばかりしているので、私の主張する事は「ただ原始に還ればよい」ということだと思われてしまうかも知れないが、決してそういう意味ではない。音楽と社会の関係をみる為に自然民族が残されているアフリカがたまたま良い対象であっただけのことで、昔の音楽でなければならぬとか民族音楽でなければならぬということは全くないんだ。

例えば、ビートルズ。彼らはなぜ偉大なのか。これは私にとって知識による追体験に過ぎないのだが、彼らは音楽上の革命をしたばかりではなく、その時代の若者の文化、そして思想にまで影響を及ぼしたからだと思う。彼らは、ポピュラー音楽の一端であるロックンロールを、文化として意識的な「ロック」にしたのだ。伝達範囲の小さい原始的な社会よりも、非常にメディアが発達した現代の方が、ビートルズのように広範囲な社会に対する働きかけが可能であると思う。(ただし、ビートルズのやったことは共和国幻想のままたまに終わらせたのだ。)

音楽と社会がどうのこうのと偉そうにしつこく書いてきたが、所詮音楽は音楽でしかないのかも知れない。しかし私は、音楽の限界を認識しつつ、それでもなお「音楽によって何が出来るか」ということを考えずにはいられないのだ。物質文明の社会であり、将来が危ぶまれている今だからこそ、私は音楽に救いを求めたい。やっぱ、音楽には神秘の力があるように思うから……

私は文章を書く能力に乏しいので、わけのわからないものになってしまった。なお、蛇足ではあるが、以上の文章を読んで面白かった人は、ロッキング・オン(ロック雑誌?)の御一読をお勧めする。最後に、私が最近「感じた」歌詞を記して、筆を置くことにする。

#### LOVE & PEACE

これだけは覚えておけよ 沈むも浮ぶも俺達は一緒だってことを

——ボリス「ワン・ワールド」

古い朝鮮の暮らしの一例 女の子は写真を撮らせてくれなかった

——YMO「京城音楽」

果てしなく遠い彼方 喜びは生きるために

——坂本龍一「リビング・イン・ザ・ダーク」

### 「今の若い者は……」

二年六組 喜田 貴美枝

よく、おとなやお年寄から「今の若い者は……」と言われる。私はそんなに年をとってはいないけれど、最近よく「今の若い者は……」と独り言を言ってしまう。それは、私より年下の人に対してでもあり、又同年齢の人に対してでもある。私は人を批判するほど偉い人間でもないし、この文を読んだ人は私のことを、理屈だけの人間だと思ってくれる。ただ、読んでくれた人の心のすみに少しでも置いてくれるだけで、私が書く意義があると思う。

私が「今の若い者は……」と考える一番初めのきっかけは中学校のS先生に聞いた話からである。ある日、先生を訪ねてみるとやけ

に疲れている様であった。「どないしたんですか。」と尋ねると、先生はポツポツ苦勞話をし出した。それによると、先生が受けもっている二年生では、無氣力・無関心・無責任の子が増え、全く活気がないそうだ。コーラス大会があっても、コーラスにむかない好みの流行歌などを選ぶ。それなのに、声を出そうとしないし、やる気もない。自分たちの教室が目の前でわやくちやにされても、何も言わない。私たちの中学の時は、いろいろ問題がおこった。しかし、問題をおこした子たちも何かのクラス対抗の大会があるという、活気がいっぱいだった。自分たちに被害がかりそうだったら、皆団結して注意した。確かに、無氣力・無関心・無責任の雰囲気は非行などを直すよりむしろいいかも知れない。私にもどうしたらいいかわからない。ただこれが学校内だけでなく、今の風潮だナァと思った。

・楽しみたい・おもしろいことをしたいという自分勝手な思いを持ってくせにしらけている。そんな人達が私の前にもいる様に思う。

そういう例をいくつか出してみると……



あるクラスで皆と遊ぶより教室でしゃべっている方がいいという意見が多かったそうだ。確かにH・Rでその方が気楽でおもしろいかも知れない。しかしクラスの役わりとして全くしらけているではないか。

よく似たことだが、ほとんどのクラスは席替えをする時、好きな人どうしかたまつてすわる傾向がある。もっと悪くなるかいつの間にか自分の席がかえられているということがある。

わがままとしか言い様がない。私は学校に来て一番よかったこと

はたくさんの人達と知り合ったことだ。いろいろな人と話し、遊び、それでいろいろなことを知り、体験する。しかしあの子としゃべってみたいと思っても、休み時間は三、四人のグループでしゃべっていてなかなか話にくい時もある。そんな時横の席になったら、いろいろ話せるのである。又私達はすぐ人を外面で判断しがちである。そんな時何かの機会です話してみても外面と全く違う場合もある。その機会の一つが席替えだと思う。

人生での宝は人との巡りあいであると思う。今その人との出会いを拒否し、自分と気が合うと信じあっている人々のグループの中から内に入っている。まるで狭い領域で鎖国をしているみたいだ。

決めつける様だがそういうわがままを強く言い張る人に限って人を外面的にみて拒否してしまう傾向がある様だ。例えば、ある子はまじめで勉強家、人からは勉強虫の様に見られている。しかし、人氣があり、にぎやかな子の方が文化祭などにしらけた目を持ち、勉強虫にみられている子の方がまじめに考えてくれるということがよくある。又そのまじめさをけなす子もいる。そんな子の方がずっと恥じるべくしらけた目を持っているのである。

私も、そんな傾向でないといえはうそになる。しかし、あえて私は自分も含めた人々に言いたい。「まじめに考える」「一生けん命にやる」ということにしらけた目を向け、おもしろいこと・しんどいことを強く主張する今の若者たちよ。確かに固いばかりが良いことではない。しかし、自分を冷静に見つめなおせ、自分のわがままを抑えて、勇気を出してしんどい方へ目を向けろ、あやふやな生活、ふまじめな生活に……。何か一つでも皆と燃えてほしい。こんな友人とこんなバカ騒ぎ的な行いは今でなくてはできないと思うから……。

## 旅

二年二組 中 森 悦 子

一枚の十円玉

手の中でひんやりとした重さ

私はどこか遠いところへ行きたいのに

手の中の十円玉もてあまして

私はどうしてもふらふらと歩いてく

ガードレールがあつて

とてもなつかしい気がして

セイタカアワダチ草が揺れてて

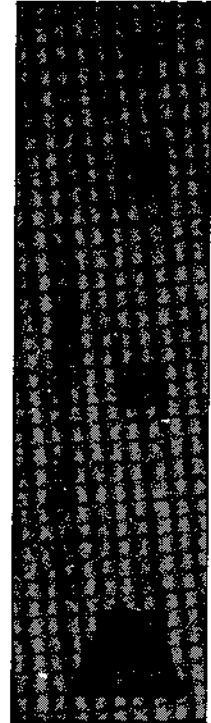
私は線路に沿って歩いてた

ただ

弦のきれたギターがころがっていた

それでも奴は歌いたがつた

十円玉が熱くなった



それはもう持てないくらい熱くなってしまつて  
手には嫌な臭いだけが残つた

同じ哀しみ 同じ辛さ  
祈りさえうり二つ

ほとんど同時に口を開いた  
—— 憐れみは必要じゃない

十円玉が少し離れたところで嘲笑う  
私はひとりになっていた

遠く続いていくのは線路だった  
それはゆっくりとカーブしていて

いつの間にか曲がれなくなった自分は  
やっぱりふらふらと歩いていった

## 流れのなかに

二年二組 稲 葉 宏 幸

流れゆくどす黒い水 その中に一人の男が眠っていた 黒い水は  
轟音をたてて流れゆくけれども 彼は静かに黒い水に運ばれていく  
黒い水は はるか遠いそのまたむこうから ありとあらゆるもの——  
愛、悪、徳、醜……を包みこんで 黒い水しぶきをあげながら流れ  
ていた その中に一人の男が静かに眠っていた やがて黒い水は絶  
壁に至り 滝となって流れ落ちる 彼は黒い水の外へ投げ出される

はやく卒業したいよ～!! (N・T)

新鮮な空気が彼を包む。彼は目を開き大きく息をする——と見るまに彼は滝壺の中へ身を沈める。そこで彼は見る——銭壺を隠し持つて化かしあいながら論議をしている「たぬき」。ラジコンの飛行機を飛ばして見せあいっこしている「きつね」。たぬきは論議が終わると小りすがこつこつためていた金をまきあげ、部屋に閉じこもつてうす笑いを浮かべそれを数える。きつねは操縦に興奮すると小鳥の巣に飛行機をぶつけては、新しい飛行機を買いに走る。そして後には小りすの死骸と、割れた小鳥の卵が無造作にころがっている。彼は目を覆う。吐き気を催し、血に汚れた黒い水が、目から鼻から口から毛穴からまでもはいってくる。彼はこの黒い水から逃れようと必死にもがく。だが黒い水はあとからあとからおしよせ。彼をのみこむ。それでも彼はもがき続ける。その間にも彼の目には血に染まった哀れな屍がいくつも映る。彼は目をつぶってもがき続ける。そしてついに彼は岸にたどりつく。彼は大きく息をする。甘い空気が黒い水で染まった彼の胸を清める。咲きほころぶ花の上に寝そべって、青い空を流れる雲をながめる。甘いかがりが漂い、彼はいつしか深いねむりへと落ちていった……流れる白い雲の中に屍が彼をじっと悲しい目で見つめている——その表情は怒っているようにも見えた……彼は飛び起きた。そして大きく息をすいこむと、轟々と流れる水の中に飛びこんだ。そして泳いだ。水はあいかわらず黒かった。あいかわらず屍がころがっていたけれども、彼は目を大きく開いて、黒い水の中を強く泳いでいた。彼の胸には清らかな水が流れていた——はるかなる、高き理想を、胸に秘め、今はただただ、今生きるのみ。

## 月光

一年二組　ピクリン酸  
温度を超えた温度、光を超えた光。一点より宇宙は始まる。  
——ビッグ・バン——あらゆるものの誕生。

月光が、辺りを冷たく異様に照らしだす。地にくっきりと影が写る。——月の女神は、今日は格別、美しい。人の心を狂わす美しさ。君はそれを知っていて、少しかげりのある笑みを浮かべる。それに取りつかれた者を、決して離すことはない。——彼はそんなことを考えながら、岸辺の茂みの陰に、疲れ切った体を寄せた。肩で息をする。目はただ月光を見つめている。静寂が世界を支配し、呼吸音だけが音のすべて。

と一瞬、彼の体が緊張した。彼は重い体を茂みから離し、駆けだす。彼は、再び走る。地を蹴って走る。もう動かない体を、無理に動かす。影が左右に揺れる。草原に影が、伸びた。サーチライトの太い光芒が、彼の姿を捕える。彼は、少しピッチを上げる。——どうせ追いつかれる——そんな思いが、彼の頭をよぎる。——今までどのくらいの距離を逃げたことか。それなのに……何故、追う？何故殺す？俺達は何をしたと言うのか——光が近づいて来る。乗り物に、それは乗っている。それ——彼らは、オーダヴと呼んでいる——は、一分の隙もなく銀色に光るなにかで、身を保護している。顔にあたる部分には、呼吸装置らしき物が、装着されている。オーダヴには、地球の空気は、ひどく有害なのだ。オーダヴはひたすら

文学を心の糧とするならば、サイエンスは知の糧である

彼を、彼らを追っていた。執拗に。むきだしの憎悪を、彼にたたきつけているのが感じられる。——オーダヴは、俺達を憎んでいる。だからと言って、殺さなくてもいいだろうに。話し合えば、なんとかあったかもしれないのに。しかしオーダヴは、それを拒否した。あるいは裏切り、あるいは黙殺、大抵は狂暴な憎悪で。何故、俺達を拒む、何故、何故なんだ!?——心の中の悲痛な叫び。

彼の目は、また月の端整な姿の方へ向けられる。——月の女神、俺は、オーダヴに、嫉妬しているかも知れない。だって、君はオーダヴを一番多く養っているから。そう火星にもテイタンにもオーダヴはいるけど。君は、何故オーダヴなんかを……オーダヴは、害毒をもたらすのに。……あるんだ俺達にも、オーダヴへの憎悪が……オーダヴが近づいてくる。俺には、もう逃げるだけの力がない。俺達はオーダヴを殺したりなんかしていない。オーダヴを、殺そうなんて思っていない。いや、しかし——その時、一条の光が彼を貫く。月光にも似て青白く細い光。彼の腕も足も、その場に凍りついたように動かなくなる。次の瞬間、彼の体はゆっくり倒れ始める。——しかしオーダヴは、死んでいつている。わずかづつだが着実に。そして、それはある意味では、俺達が殺していることになるのかもしれない。ある意味では——彼の脳裏を、場面——想像したものも——が横切る。

——巨大コンピナート 煤煙の空 ヘドロの海  
——青い(!? )空 青い空 白い砂浜  
——核分裂を使った原子力発電所 飛び交う放射線  
——核爆発のきのこ雲 気流によって運ばれる死の灰

——DNAの二重らせん構造。水銀灯の下にいるオーダヴ  
——オーダヴがDNAを組みかえる AUG・UCG・AAT…  
——オーダヴ達の戦争。人口調整の微妙なバランス。  
——地球黎明期。破傷風菌達の世界。

——繁茂する植物群 死滅する嫌気菌  
——ティラノサウルス 世界にはびこる恐竜  
——恐竜はいない。被子植物と哺乳類。

——直立した猿 アウストラロピテクス ネアンデルタール  
——ホモ・サピエンスと自称していたオーダヴ・オールドタイプ  
——カドミウム有機水銀ヘドロの海、そこで遊ぶ彼らの姿  
——酸化窒素 亜硫酸ガスを呼吸する彼らの姿。

——地球には住めなくなったオーダヴ、月や火星へ向う脱出船  
——深遠な宇宙の淵、銀河へ向かう彼らの宇宙船

——そう、宇宙へ翔ぶのは俺たちの時代、かつて植物の果たした役をこんどは、オーダヴがやってくれた。だから俺たちは、行く。果てない宇宙へ。そして君の所へ——

月光が彼を包んでいる。銀白色と黒。

——いつかね——月の女神の声が聞こえたような気がする。「ディアナ……」

光はただの物体と化した彼を照らしている。永遠の沈黙。光が煌々と輝くだけ。

——そう宇宙へ飛ぶのは、俺たちの時代——



ただ勉強するだけが青春ではない。もっと高校生活を enjoy すべきである

## ある日にねこがしゃべったこと

三年八組 お た ま

もうだいが前のことだからよく覚えてないんだけど、公園で泣いている私をそっとだきあげてくれたのがTでした。それがTと私の出会いです。それからTと私は仲よしになりました。といっても、はた目には私が一方的にTにお世話になってるって映っているだろうな。

私はべつにこれといった仕事をもっておらず、さしあたってやらねばならないこと、やるべきこと、とりたててやってみたいこともないので、一日中ごろんと寝っころがっています。Tに呼ばれた時「ニャアアーン」って返事したら、「ヨシヨシ、オリコウサンネ」とかなんとかいって、Tのきげんがよくなります。そしたらごはんの待遇もよくなるの。だから仕事といえば、Tのごきげんをとったり、Tにかわいがられたりすることかしら。だって私、Tにボイされたらたまったもんじゃない。もう今度公園で泣いたって、こう大きくなったんじゃ誰も相手にしてくれないかもしれないもん。

近所にはお友だちもたくさんいます。やっぱり仲間どうし対等につきあえるし、Tとのつきあいでは得られない数々の楽しさがあります。楽しく遊んだあとの、私のぬれた首筋、うなじってとこかな、を見るなりTは、「もー、イヤラシイ子やねー。」と言って眉をひそめました。今度からは、Tにみつからないようにしなくっちゃ。

Tは時々ため息をついて、しげしげと私を見つめて「あんたはいねえ。好きな時に好きなだけ寝れて。気がむいたら遊びほうけて

食いつぶれる心配はないし、将来のこと考えて憂えることもないやろ。ほんまに気楽な身分やね。」って言います。なんのなんのノそりゃあ、おっしゃるとおりですけど。

毎日毎日何もすることがなくて、寝てるだけのほりあいのない単調な生活。ネズミとやらが姿を現したなら片っぱしからとつかまえてやるのに。私にだって、そのくらいのは任せてほしい。ネズミがいらないからってのは言い訳かしら。それより、何よりも一番イヤなのは、私のすべてをTに依存しているってこと。今はこれでよくたって、いつTと仲たがいするかもしれないし、Tのきげんをとるのだってけっこうたいへんなんだから。そんなふうに、他律的に他人に左右される生き方じゃなくって、もっと自主的に生きたいんです。

友だちのノラは、ポリバケツを倒すのなんかがお得意で、一人で生きています。カッコイイけど、すぐたいへんだろな。とても生半可な心構えではできそうにな。私にはノラになりきる勇気ないわ。

そのへんが矛盾してて、自分でも甘えてるって思ってるんだけど。ノラは「人にかわいがられる性質とか容姿、毛並みをもちあわせて生まれたあんたは、もうそれだけで生活能力が十分身についているんだからうらやましいよ。」って言います。でもまあとりあえず、ノラのまねしてポリバケツをひっくり返してみました。とたんにTがとんできて、「キタナイノ」って言ってピシャリ。「おとなしくしていなさい。」ってあったかいコタツに放り込まれました。く



今度こそテストがんばるどー

やしっくってね。コタツから脱出して、もっぺん挑戦してやろうと思つた……とたんにたまらなくねむくなつてしまつて。どうやら私のからだは生まれつき——先祖代々——よくねむるようになっていゝらしい。こればかりはどうにもならない自然のメカニズム。目が覚めると、ゴミ回収車の行ったあと。ポリバケツにはもうなーんにも残っていない。やっぱあの時、Tに何と言われようと、どんなにねむくたつて、ノラに徹すべきだったのかなあ、なんて私なりに考へてゐるんです。

私が何を言つてもTは「ニャー」としか聞きとつてくれないのが残念だけど、ここしばらくは今まで通り、Tと仲よくいけそうです。

## 響 葬 (ひびきにほうむる)

三年七組 石 戸 加 容 子

大声で叫んでも いいんだぜ。

エレキ・ギターのような、

デッカイ 響きで。

奏でるのは、

モチロンノ

オマエさ。

そして みんなに知らせるんだノ

「この部屋には  
誰も来ませんでした」  
って。

## 僕の高校三年間

三年五組 武 永 伸 一

人生は夢であり、死は夢からの一種の覚醒である——嘗て、シヨウベンハウアーの「意志と表象の世界」にとっぷりつかっていた頃、こんな言葉に魅せられたことがありました。夜半、ヴェランダに出て星空に見入っていると、この永遠に広がる空間にあつて、人間なんか、なんてちっぽけなのだろう、と思われまふ。そして、確かに、こんな卑小な存在である自分など、夢にさえなれない寂しいものにすぎません。では、どうして何のために自分は生きているのだろう……。それがすべての出発点でした。

最初に感じたのは、たとえようのない不安、いままでも絶対真実のはずだった足下(あしもと)が崩れてゆく怖さ、そして、しりぞみでした。人生の意味、自分の存在意義を考える時、そのアプローチの方法には、積極的肯定と逃避的否定の二通りが考えられますが、僕は後者に陥ってしまいました。やはり、甘えた虚弱な精神の故なのでしょう。情けないことに、いつの間にか歩むべき方向をまちがい、生きる意味を見失なつてしまつたのです。僕は虚無感に襲われ、何も手につかなくなりまふ。それでもなお、得られそうにもない答えを求めて、本を漁り考え続けたのは、否定することが真実でないことを、心の隅でわかつていたからでしょうか。よし、こうなつたらことん考え詰めてやろうと、決心しました。

人生が神―創造性の意志であるとは、とうとう確信できませんでした。イエスの生涯に、僕は感動をおぼえます。おそらく彼は、地上のすべてのものの中で、最も偉大であると思います。僕は彼が神の子であることを信じます。神がおられることも信じます。それでも、信仰を持つことは出来ませんでした。なぜなら、信仰とは思想でなく、体験だからです。信仰することが人生だからです。すべてを神に預けるには、僕にはあまりに勇気がありません。信仰とは試練だと思うのです。

キェルケゴールが、『死にいたる病』つまり絶望を、人間の神からの離反の結果とし、最終的には、絶望することによって神と自己との自覚をせまった時、僕はもう、ほんとうに道が八方塞ってしまっただけだと思いました。その頃、たまたまその頃、ある女子高校生の方の文章を読む機会があり、その中で彼女はこう書かれていました。「しかし、私にはむしろ、キェルケゴールが『罪としての絶望』へ、自己の内面性へと歩んだのとは反対の方向に、真の実存、真の信仰があるように思えてならない。」

ぼんやりながら、僕は闇に光りがさしてくるのを感じました。人生とは絶望でも否定でもない。幻い頃のあの自然と一体化した肯定だけが、真実なのでもない……。そして、僕を新しい世界へ導いてくれたのが、ゲーテでした。

僕が、人生の意義を肯定できるようになったのは、ゲーテが休むことなく愛し、歩み続けた姿に出会えたからだと思います。彼の人生はけっして幸せな道のりだったわけではありませんでした。それ

でも「ファウスト」において、彼は塔守リコンコイスの口を借りて、その苦悩に充ちた人生をさえ、愛し、たたえます。「幸福な両の目よ／お前たちが見てきたものは／やはりほんとうに美しかった。」と。七十才を過ぎて十七の少女に恋をし、死に際してなお指先で、何かを綴ろうとしていた彼の生き方に、僕は魅せられたのです。それは理屈では計れないものでした。

今まで僕は、自分の存在を肯定し得ない限り、一步も動けはしな一と思ってきました。立ち止まり、前進しない自分を正当化し、甘やかしてきたのです。が、今やつと僕は、歩き続ければ人生は美しい、美しければそれでいいと、思えるようになりました。夜空を見れば星が美しい。だから人生は価値がある。人生が夢ならそれでもいい。そう言い切れるようになりました。

高校三年間、自分は何をしてきただろうと振り返ってみると、後悔ばかりが残ります。友人達がみな、クラブに勉強に打ち込んでいく様子は、どれだけ羨ましかったでしょう。僕は自意識過剰な、くだらない思考の遊び以外、何もできませんでした。ただ、それでも自分の存在を肯定し得たのが、唯一の進歩でしょう。それを確かめたくて、下手くそな文章を綴ってみました。大手前を卒業すればまた、新しい世界が開けるでしょう。そして、これからこそ僕は、いつかおくつきに一人眠る時、やはり人生は美しかったと言えるよう、精一杯生きてゆきたいと思うのです。



## 時は流れて

二年二組 ノ エ ル

時は流れて すべてが 生まれかわっていく

何事もなかったように そ知らぬ顔をして

その中の 一人の 存在が 私

ちっさいちっさい 存在が 私

時は流れて すべてが 生まれかわっていく

瞳に映るものは すべてと思ひながらも

心に映るものが 本当だと 信じて

存在のない 透明な一人が 私

見えない見えない 一人が 私

涙で涙で 流されて

いったいどこへいくのだろう？

笑顔の中に溶けこんで

キラキラ輝く水の中

独りじゃない

そう 私も生まれかわる

限らない夢を追いかけて

時が流れて…

## 虚 無

二年九組 若原久美

その宇宙船は、星々の浮かぶ静かな暗黒の宇宙空間から、太陽系の第二惑星と第四惑星の間を指して飛んできた。そして、その金属の船室には、一人の男が眼を輝かせ、厚い強化ガラスの舷窓に顔を押しあてて、眼下にゆらゆらと近づいてくる地球を見守っていた。

「地球が、俺の地球が……。」

彼はすでに老いていた。四十年もの間、宇宙開発の第一線に立って、未開の地域で働いていたのだが、今そこから退いて、無事地球に帰還したところであった。四十年振りに見る地球は、美しかった。美しすぎた。あまりにも……。

地上に降り立ち、最初に彼の目にしたものは——信じられぬことだが——彼が発見した当時と少しも変わらぬ地球であった。彼は、何か固いもので頭をぶん殴られでもしたように、あやうく倒れそうになった。

「そんなバカな。地球は、あれから四十年は経っている筈だ。俺は、夢でも見ているのか？それとも、時間か空間の何かの狂いで、

好きになってくれなくてもいいから優しい瞳で私を見てね

次元をとりちがえて、過去の地球へと戻ってきてしまったのか？」彼の宇宙船が着陸した、アメリカのフロリダ州ケープ・ケネディ空港には、四十年前の、まだ若い姿のままの彼の妻も、彼を迎えに来ていた。

「キヤス!? どうして、どうしてこんなことになったんだ? なぜ? なんのために……。」

「何も訊かないで、サーザ。お願いだから……。計り知れない神様の御心のせいよ。神様が、私達に優しくして下さいのよ。」

「しかし……。」

「駄目よ、そんなに考えちゃ。深く考えると不幸になるわ。」キヤスは、ちょっと、その長いとび色のまつ毛をふせた。「あなたは、私に、ここに、あなたのそばに、ずっといて欲しいでしょう?」

「そりゃ、もちろんだとも。愛するキヤス。」

「それなら、私がここにいて、あなたがそこにいる、それで十分じゃないの。ね、もう何も言わないで、この事実を受け入れてちょうだい。私達は幸せになればいいのよ。」彼女は涙ぐんでいた。

「そうだね。すまない、キヤス。」そうは言ったものの、彼は、説明のつかない、奇妙な胸さわぎをおぼえずにはいらなかった。

彼は、四十年前に二人で暮らしていた家へ戻った。

「キヤス! キヤス! 何もかもそのままじゃないか! 俺のベッドも、銀のティーセットも、それから……。」

「サーザが帰ってくるまでは、いつも考えてたのよ。」

「もう懐かしくて、懐かしくて、死にそうなくらいさ。今でも夢みたいな気がするよ。」

その夜、彼は夢を見た。夢の中では、彼はやはり一人きりで、まっ暗な真空の中に停止して、前にも後ろにも動かない宇宙船の中にいた。(これは、夢なんだ。俺には、地球も、俺の家も、キヤスもいるんだ。早く醒めてしまえ!)

地球での、感情に押し流された数日も過ぎ、やっと論理的に考えることができるようになった時、彼は、あることに気付いた。地球は、やはり変わっていたのである。それも、彼が今までずっと、彼の心の中にだけ描いてきた、理想的な社会と寸分たがわぬ姿として……。

「こんな筈はない! 何かまちがっている! こんな世界が、現実には……この世界は……俺の心の中にだけ存在しているものなんだ……。」

現実には、存在しなきゃいけない世界なんだ……。」

不意に、彼は、四十年前の列車事故のことを、はっきりと思い出した。(そう、キヤス。キヤスは、あのいまわしい事故で死んでしまった筈なのだ。そして、俺は、彼女のこと、地球であったことも、何もかも忘れるために、遠くの星の涯で、危険ばかり求めてきたんだ……。それならば、今、俺の目の前のテラスで紅茶を口に運んでいるキヤスは、本当は誰なんだ。彼女がキヤスであるわけがない。誰かほかの人のだ。誰なんだ、一体……。)

そこまで彼が考えた瞬間、キヤスが……消えた。あたかも、陽光に照らされて、雪が溶け、蒸気と化したかのように、空中から消滅したのである。それも、彼が見守っているなかを、忽然と……。

「キヤス!?」

いや、キャスだけではない。彼のまわりのものすべてが、人が、テラスが、街が、ゆっくりと、しかし確実に消えていった。そして、最後に残ったのは、彼の今いる大地、つまり地球のみであった。

「みんな……みんな、消えちまいやがった……。キャスも、何もかも、みんな……」

だが、それだけではなかった。その最後に残った地球までも……。

（俺が、今見ていたのは、俺の記憶から取り出した過去の幻影、俺の心の中にある、こうあって欲しいと願う気持ちをうつしとっただけにすぎない虚像……。俺が、今いたのは……虚無の世界ノ……）薄れていく意識の中で、彼は最後に、そう思った。

気がつく、彼は、彼の宇宙船の中にいた。宇宙船は、かつて地球が、あつた筈の空間で停止していた。

「ああ、俺は本当に何もかも失ってしまった。たった一つの、そして最後の拠り所であった、地球さえ……。これから、もう一度宇宙開発基地へ戻っても仕方がない。俺にはもう、帰るべき場所すら残されてはいないのだから……」

故郷の消失は、宇宙にある、いかなる危険でさえなし得なかったことをした。彼は、今まで決して押さなかった、そして、どんな苦しい時にも押そうとは思わなかった、ある一つのボタンを、ためらわずに押した。

彼は、微かなめまいを感じた。大気のないせいで、瞬きもしない星々の下で思



い出すにはふさわしくない、キャスの暖かなとび色をした瞳、灼けた砂の匂い、がする肌、太陽の匂いが混じった香水の芳香、など……。そして、それらのもので構成されていた、彼の地球の記憶。彼の青春の記憶。そんなものが、はかない螢気楼のように、彼の目の前に立ちこめていた……。そういうふうなことを考えていたのは、彼には長い時間であったように思えたが、あるいは、ほんの数秒間だったのかもしれない。

「俺は……空の高みで、仄かな光を放つべきもの、そっとそのままにしておいて、決して再び、この手で触れてはならないものに、触れてしまったのかもしれない」

深い宇宙の底で、小さな光が閃いた。

## Rêverie

二十年組 浅野 晃

その川は、都市河川です。でも、メタンの浮く……そんな川じゃありません。水かさは浅く、清き水の流れる、半人工の美しい川です。夕刻になり、空は深い青となり、だんだんと深くなり、限りなく深くなり、青は深い底に潜って、ついには空を星にゆずります。川はそんな空を静かに見つめています——そんなとき、川は脳腹に軽い感触を覚えます。川を求める人々が、やって来たのです。安らぎを求める人々や、恋を語る若者達や……。

そんな人々の言葉を聞きながら、川は彼らのために、BGMを奏でます。静かに……静かに……。

「あの人は何故、あんなに偉いの？ ぼくは何故……できないの?！」

「君だって、できるじゃないか。できることがあるじゃないか。そのことができるが、君の生きる道だよ。」

BGMと一緒に、川は人にあたたかさを与えます。その人々はまた、川に抱かれにやってくるでしょう。そうせずにはいられない感情を、川は与えてゆきます……静かに……ずっと静かに。

夜はふけ、人もいなくなり、街の明りも消えてゆきます——街は眠りにつくのです。川は、街への子守歌を歌いながら、天のオリオン座にあいさつします。静かに……もっと静かに……。

その夜も、川は流れてゆきます。静かに……いつも静かに……

*Testament No. 2 : Thou shalt not envy anybody*

## 寂湖抄

二年五組 染森由紀子

寂れた、ほとんどの列車が通過してゆく山奥の駅に、その日の午後遅く普通列車が着いた。一人の長身の男は小さな鞆一つという身軽な出立ちで駅へ降りた。グレーのコートはしわだらけだったがどこか都会臭さが感じられた

「お客さん町から来なすったね、今の季節じゃ何もないし、もうじき雪も降るじやろつ。ここには都会より早く冬が来るからのう……。」駅長兼駅員の老人が喋り出した。男は「私は急いでるんだ。」と言って足早に歩き始めた。実を言うと何の目的もなかったが老人の長話に付合うのは御免だったからだ。駅の向いに雑貨屋と郵便局があ

る他に店というようなものもなく、ひなびた家並が続いたがそれもしきにまばらになった。「本当に山しかないんだ。」男はつぶやいてそれから、気が進まなかったが駅へ戻ることにした。とにかく民宿の一軒も見あたらないので、野宿よりはましだと思ったからだ。だが列車は明日までない。男はベンチに腰掛けてコートの襟を立てた。その時ふと、誰かに呼ばれたような気がして辺りを見廻した。そして自分の正面に視線を戻した時、そこには一人の小柄な少女が立っていた。「あっ……！」と思わず声を立てたが、少女がくすくす笑ったので少しむっとして口をつぐんだ。すると突然「おじさん泊る所ないんでしょう。私の家に来るといい。」と少女が話し出した。それはまるで湖の上を風が渡っていくような声だった。男はどうもわけが分らず怪訝な目つきで少女を見ていた。「君の家は……民宿なのかい?」「違うけどいいんだよ。さ、早く。」男は不審に思っているが少女のせかず声につられて歩き出していた。

道は坂になっていて下るにつれて家も少なくなり林へと続いている。もうすでに小一時間も歩いたろうか。「君の家はずいぶん山奥なんだな。」「そうでもないよ。すぐそこ。ほら、ね。」突然林が終わり視界が開けた。そこには青い湖が静かに水を湛えていた。そしてそのほとりに小さな家があり、もうすでに薄暗くなった辺りに窓から光がこぼれていた。少女は傾いた戸を開けて中に入ったが、男が変に遠慮しているので、母親らしき女が出て来てこう言った。「ここいらでは、よく、宿場がなくて困りの人がいらっしやいます。こんなあばら家でも、駅よりはましだと思ってお呼びするのです。さあ、どうぞ……。」男はしかたなく靴を脱いだ。しばらくは、ひなびた田舎造の家屋に妙な郷愁を覚えながらぎこちなく座っていたが、

暖いいろりの縁でぼつりぼつりと語るうちに心のわだかまりも溶けていった。

男は東京に住んでいた。小さい頃に両親を亡くし、親類に引取られてすごした少年時代も幸せなものとは言えなかった。そして勤めていた会社も上役と喧嘩をしてやめたところだったのである。

男は深い溜息をついた。その時、窓の外では雪が降り出していた。白い大きな雪がひらひらと舞い落ちて暗い湖面に吸込まれてゆく。何か不思議な気がした。不思議な気分のまま床につきうとうとしはじめた時、男は母が昔聞かせてくれた話を思い出した。「山に住む鬼婆は、旅人を泊めてその晩とって喰うという……」男は一瞬「まさか」と思ったがあまりの非現実さに苦笑してしまった。

次の朝、目を覚ました時、コトコトと鍋の音がして味噌汁のいい匂いがしていた。男は外へ出て冷たい空気を思い切り吸った。ほんの少し木の葉の上に雪が積っている。昨日は暗くてよく分らなかったが、湖は少し低い所にあつて、見上げる山の中腹に線路が走っている。駅は林の陰になつてゐるのだから。ここからは見えない。カラリと戸が開いて、少女が白い息をはいて走ってくる。その時、男ははっとした。

誰かに似ている。この少女……そうだ、幼なじみの幸ちゃんによく似ているのだ。遠くへ引越してしまった幸ちゃん……

今頃どうしているのだろう。目を閉じるとそこには幸ちゃんの笑顔があつた。昔住んでいた家の板塀をよじ登ると、その向うで幸ちゃんが呼んでいる。「菜の花



を摘みに行こうよ……」目を開けると少女が笑っていた。男は懐しい夢を見たような気持ちだった。

男はその少女の笑顔をじっと見ていられなくなって湖面に目を移した。そしてぼつりと「私は今日帰るから。」と言った。途端に少女の顔がくもったがそれでも無理に笑って「そう、それじゃ母さんにそう言ってくる。」と言って走っていった。その淋しそうな笑顔は引越しの日の幸ちゃんにそっくりだった。

午後列車に着いた。男は何か忘れ物をしたような気持ちで少女と別れた。少女はいつまでもいつまでも手を振っていた。その姿は淋しげに遠ざかってゆく。でも、また降り出した雪で、すぐに見えなくなってしまった。

それから三年が過ぎ、男は町で家庭を持った。小さいけれど暖かな、彼が子供の頃求めていたものだった。しかし、ただ一つだけ気になる事があつた。それはあの少女のことである。そして秋の或る日、男は会社から休暇をもらつてあの湖のある駅への切符を買った。懐かしいあの駅に降り立った時、あの老人もそのままの姿でそこに居り、何もかもがあの日のままであつた。男は逸る気持ちをおさえて湖への坂を下つた。湖の青さも変わつてはいない。だが、そこには確かにあつたはずの家はなく、ただ風に散る落葉が湖面を美しく彩っているだけだった。「どうしたのだろう、家の跡すらないとは……」男は駅に戻つた。あの老人なら何か知っているかも知れない。そう思つて……

「あの、湖のほとりに住んでいた親子はいったい何処へ行つてしまったのですか。何か御存知ありませんか？」男は尋ねた。「湖の

ほとりになんて誰も住んでやしませんよ、じゃが……それでも何もない季節になると湖の精が淋しくなって人を呼ぶそうじゃ。でもそれは本当に淋しい心のもんにしか見えないということじゃよ。」老人もまた淋しげにそう言った。

男はその日の午後の列車で町へと向った。あの少女は本当に湖の精だったのだろうか。少女に会う術もない今、何もわかりはしない。窓の外、はるか下方に湖が見えた。真赤な夕焼に染まる湖のゆらめきは、まるであの少女が手を振っているかのようにも見えた。

## 風景 I

二年五組 中瀬 祐美

そのひとが列車に乗ってきたのは京都だった。そばを通りすぎる時、理由もないのに何故かそうせねばならない気がして、私はそのひとを見上げた。美しい人だった。それは人の言う美しさと違っていた。もっと、ずっと静かだった。思いがけず、そのひとが私のななめ向かいの四人掛けの座席に入ったとき、自分でとまどうほど胸が鳴った。馬鹿、と自分に言った。

列車が動き出し、私は又新聞を読み出した。それきりそのひとのことを忘れた。

仕事の夢を見ていた。目が覚めて時計を見ると、ほんのわずしかたっていない。大きくのびをして頭を振った。客は少なかった。あのひとは、窓ぎわではおずえをついて外を見ていた。私はひじかけに片手をおき、彼女を見つめていた。列車がゆれると、そのたび

に背もたれが視界を邪魔した。

ポケットから煙草を出して火をつけ、目を窓の外に移すと、湖が続いていた。もう、ヨットの白い帆はどこにも見あたらず、時々通りすぎる駅もひっそりしている。その時、横の通路をぶつぶつ言いながら一人の酔っぱらいが通った。足元がおぼつかない。ひどく酔っている。私は、酔っぱらいがきらいだった。酒を飲んで苦しみを忘れようとする姿が哀れに思えて、それが嫌だった。私を見て彼はわからないことをつぶやいた。黙って答えずにいると、彼は私の席から離れた。そして次に、あのひとの所へ行った。私ははっとしてそちらを見た。酔っぱらいは、又、ぶつぶつ文句を言っている。

あのひとがどんな様子をしているのか、彼の背中で私にはわからなかった。と、突然彼はゲラゲラと笑い出した。そして、ふつり黙りこんだ。私は、息をつめてその光景を見ていた。心臓がやぶれそうだった。酔っぱらいが、あのひとの方に手をのびかけた時、私は夢中で立ち上がると、そばのかばんとコートをひつつかんだ。そして強引に彼を押しつけると、あのひとの横の席にかばんを置き、コートと、それからすいかけの煙草を持ったまま、酔っぱらいの前に立ちはだかった。彼はぼんやり私を見ていたが、一言二言毒づいて、そのまま行ってしまった。私ははっとして立ちつくしていた。煙草の灰が落ちそうなのに気づいて、窓の下の備え付けの灰入れにそれを突っこんだ。

「お座りになりませんか？」声がした。私は彼女を見た。彼女は、少し笑っていた。おかしかったらう。この人なら私があんなふるまいをしなくてもうまくあの酔っぱらいをあしらったかもしれない、

と私は後悔した。もの静かで落ちついた声の人だったから。若者のように、慌ててぶしつけな行動をした自分を恥じた。

「いえ、突然やって来て……すみません。あなたは驚かれたでしょう。」私はぶっきら棒に言った。彼女は目をふせて、首を振った。

「いいえ、困っていたのです。本当に助かりました。」

私は結局、彼女の右前の席に向かい合って座った。

二人とも、口数が少なかった。何か、話さない方が自然な気がして、黙っていた。私はうしろにもたれて目を閉じた。時々目を開けると、彼女はいつも外を見ていた。淋しい人に見えた。

どれほど時がたったのか、まぶたに影がおちたので、彼女が動いたのがわかった。私は眠っていたわけではなく、指先が私の左の胸に軽くふれたとき、驚いて身をおこした。見ると、ほっそりとした白い手にいちようの葉を持って、彼女は困った顔をしていた。

「ごめんなさい、起こしてしまって。あの、胸のポケットからこれが落ちそうだったので。」あまり心配気に言うので、私は笑った。

「いや、眠っていたんじゃないやありません。気にしないで下さい。」

「そう、良かった。でもごめんなさいね。先ほどから、ずっと気になってこの葉を見ていたのです。あなたがお取りになったのですか。」

「いや、知らなかった。いつの間にはいったんだろう。……そうだが並木道の下を歩いていた時かも知れないな。」

私はひとり言のように言って、彼女の指先のいちようの葉を見つめた。あのひとは、それを指でくるくるまわしながら言った。

「そうですか。じゃあこのいちようは、一番初めにあなたにふれたのですね。」

そして長い間ずっとそれを見つめていた。あまり見つめているので私は冗談半分に言った。

「それ、あなたにあげましょうか。」彼女ははっとして顔をあげた。

「え？」

「それ、あなたにあげます。」私はもう一度言った。すると、彼女は微笑んだ。そして急に真面目な顔をして、ありがとうございますと答えた。二人で笑った。

「どこまでいらっしゃるのですか。」

「仕事で金沢に。あなたは御旅行ですか。」

「ええ、そんなところ。」

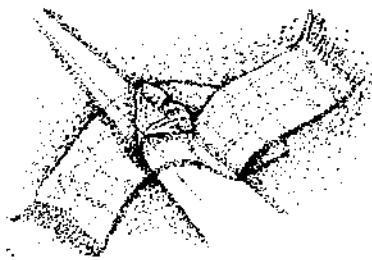
「おひとりで？」

「気まぐれなのです。急に海が見たくなって。丁度、休暇がとれたものですから。」

「そうですか。」

それきり、私たちは又黙りこんだ。もっと話したい気もしたが、やめた。私は新聞を読んでいたし、彼女は暑くなったのか、セーターの上から首に巻いていたマフラーを外して、それを手でもてあそんでいた。その後は、ずっと外を見つめていた。

あのひとが降りるとき、私は「良い旅を。」と、言っただけだった。彼女は、「どうも。」と軽く頭を下げて車両を出て行った。私の知らない、小さな駅だった。彼女がいなく



なった分だけ、空気が冷たくなったような気がした。発車の合図がした時、かばんのかけに彼女のマフラーを見つけた。私は急いで窓をあけると、身体を乗り出し彼女の姿をさがした。ありがたいことに、彼女は列車の進行方向へと歩いていった。私は叫んだ。

「これを、忘れ物ですよ。」ゆっくり動き出した列車が、彼女を追いつく瞬間、私はできるだけ遠くに腕をのばした。

「さあ、はやく」彼女は小走りに駆けながら、私へと手をのばしたが、あともうほんの少しのところで、なぜだか手をとめた。

そして、マフラーを受けとるかわりに小さく手をふって、

「さよなら。」と言った。

私は茫然として、ホームに立つあのひとを見ていた。小さくなって遂に見えなくなっても私はあのひとを見つめていた。それから、ようやく列車の中に身を引くと、窓をしめて長い間ぼんやりと座っていた。風にあたった顔がつめたかった。

「何故。」同じ言葉を繰り返しかえた。私は静かに手にもっていたマフラーを頬にあてた。あたたかかった。丁寧に、きっちりマフラーをたたむと、私はそれを背広の内ポケットに入れかけた。だが、思いなおしてそれを、うす陽のさしている右前の席に置いた。

少ない客のほとんどが金沢でおりのようだった。コートを着て通路を歩いていくと、列車が大きくゆれた。向こうの車両に、あの酔っぱらいが見えた。彼はシートの上で身体をまるめて、小さなことのように眠っていた。彼と私しか、あのひとを知らないことが、かなしかった。ドアが開くと、風が私のそばをすりぬけていった。冬の香りがした。

## — MIRAI —

MIRAI

それは果てなきもの

MIRAI

それは追い続けるもの

MIRAI

それは自分が創るもの

汗と涙を振りすてて

過去の自分とサヨナラして

今、歩もう／限界に向かって——  
今、生きよう／未来に向かって——

空も海も地も

すべて あがためにあるのだから  
すべて 明日のためにあるのだから

MIRAI

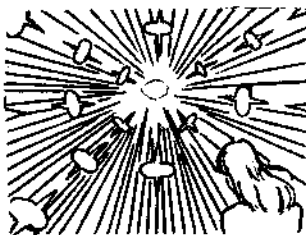
それは 永遠なるもの

そして……

Run Away

今 駆け巡る

二年三組 華栄湖



## アメリカ紀行

二年四組 上田利香

私は、今年の夏休み七月末から一ヶ月の間、アメリカは西海岸で、家庭滞在、俗にいうホームステイに行ってきました。そこで、私が、あの広大で、生きている国アメリカで見たり、聞いたり、肌で感じとったさまざまな体験談をこの場を借りて、少し、書いてみようと思います。

七月二十五日午後、私達一行は、日本を、アメリカのシアトル、タコマ国際空港へ向けて、発ちました。成田→シアトル十時間の内ほとんどが夜という少し不自由な機内でしたが、たくさんアメリカ人の友達もでき、楽しい、空の旅を経験しました。そしてやっと目的地に到着したのが、同日早朝ノ地球って本当に回っているのだという実感がひしひしと湧いたのを今でも覚えています。

アメリカに着いて、まず私の目に飛び込んできたものは、その広さでした。見渡す限り続く道、道、道。ドライバー達も広い道路を我がものの顔で走っていました。(驚いたことに彼らはその殆どがシートベルトを着用しているのです。日本では恐らく見られない光景ではないでしょうか。日本でも励行すべきことではないかと感じた次第です。)大体アメリカの道路は広の上に車台数が少ないので、フルスピードで、止まることなく走ることが可能なのです。

カナダに隣接したワシントン州のシアトル市郊外エバレット、ここが私の滞在地です。森と湖に囲まれ、夏凌ぎ易い、とても美しい

町です。そこで私が出会った人々―全て信心深い、真の意味で、人間的、な人々でした。私のホストファミリーが特に信仰していたせいかもしれません、教会には頻繁に通いました。という風に言いますと、中世のカトリックの厳かな教会を想像する方も少なくないと思います。プロテスタントが全キリスト教信者数の六〇%以上を占めるアメリカではもはやそんな事はありません。別けても、私の通った教会は個性的で、しかも音楽を主とするものでした。ミサの前に、ドラムの快いリズムとピアノの軽快なタッチに乗せて歌い牧師様の有難いお説教を受ける。大抵がそういうものでした。ミサが済むと今度は、年令別の日曜学校。そこで子供達は神について、家族について、はたまた人間の尊さ、生きてゆく上に必要なこと etc. についてなど、教えられ、ゲームや歌、議論に興ずるのです。(指導者は高校生、大学生のボランティアが殆どです。)私は専らホストファミリーの妹と共にナースリーで、幼児相手に、絵を描いたり歌ったり、あやしたり。とても楽しい一時タイムでした。

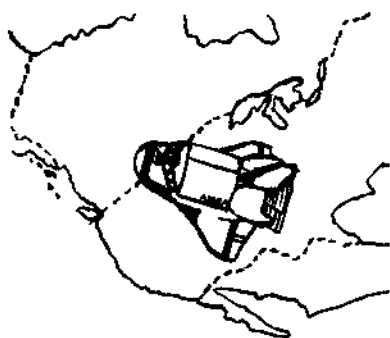
また毎水曜日にはミーティングがあり、十代の若者是一个の部屋に集い、教師、学者、医師など当地で著名な方々を招き、その専門的見地に立って講話して頂くのです。私の印象に残っているのは、さる医師による思春期の恋愛についての話です。スピードが速い上に専門用語がポンポン飛び出す始末で、私は最前列で聴いていたにもかかわらず、ホストファミリーに再度説明して貰わなければなら有様でした。しかしその内容は、聖書に基づく、非常に深いものでした。

アメリカにおいて、宗教というものは、人間の生活をも支配するものなのです。喜びも悲しみも、恋愛も、子供の戯も。全てそう

のです。親達は神を信じ、家族を友を愛し、日々の生活・食事に感謝して生きる。子供達はそれを見て育ち、自分もそうなるべく親を尊敬して生きる。言うなれば、無言の教育、が行なわれているのです。そういう家庭から非行なんて起こりようもありません。昨今、日本で騒がれている校内暴力、家庭内暴力の原因は、案外もっと身近なところにあるのかも知れませんか。

それにしても感心させられるのは、私達と同年輩の若者達の考え方の立派なことです。前述した様な会合も、討論会も、全て自主的に行なわれ、意見も活発に飛び交い、圧倒されてしまう程です。あまりにも意見・質問が多過ぎて、議論が熱くなり、大人達が困惑しきって右往左往する場面もありました。そういうものを目の当たりに見ると、同じ世界を、世代を生きる若者の一人として恥ずかしさで赤面する思いでした。つけ加えて、アメリカの若者は勤労精神が旺盛です。親のスネを噛っている私などとは比べものになりませんでした。

学校について考えてみますと、第一の相違点はやはり広さです。殆どの校舎は平屋建てで、駐車場など、大手前の全面積以上に匹敵するのではないのでしょうか。それに、大抵はホームルームを持たないで、毎時間毎時間生徒が教室を移動し、違う友と一緒に勉強するそうです。車の免許については、交通機関の発達しないアメリカでは必要不可欠なものです。親達は、十六歳で取れるのは快く思っていないらしく、十八歳にならないと取れない日本の方が良いのとです。



その他日本の方が良いと思われるものに、テレビ番組が挙げられます。アメリカではチャンネルが十以上あり、早朝から深夜まで放送されるので数はすごいのですが、日本の様なドキュメンタリー番組が殆ど見られないのは驚異でした。(宇宙船艦ヤマトがのHAR BLAZERSとして放映されていたのは特筆すべき事ではないでしょうか?)

三週間のホームステイを通して感じたことは数知れずありますが、その内の一つに、ほんの些細なことにも喜びを見つけ、家族、仲間と共に楽しむという事があります。彼らに比べ日本人は、余暇の楽しみ方が下手で、家族が個人的にバラバラに楽しむといった傾向があるのではないかと思います。(週休二日制がまだまだ普及していないせいかも知れませんが。)

ホームステイの後、私達は一週間をサンフランシスコ、ロスアンゼルス、ハワイで過ごしたのですが、唯々日本人の多さには驚かされました。立ち並ぶ商店の店先には、日本語で『いらっしやいませ』……街を歩けば日本人が客引きに寄ってくる……逆効果だということが分からないのでしょうか。(彼らの多くは、留学生です。中には来年日本に復帰してさる女子校の教師になる人もいました。どことは言いませんが……)それにしても、外人の多さ、世界中の人が集まっているのです。そこで私は英語が万国共通語であることを改めて思いしらされたのです。現に私達は、英語を母国語としない多くの人々とコミュニケーションを計ることができました。(お互い拙い英語

でしたが。言葉とは、有難いものです。

犯罪の町ロスアンジェルスで深夜スーパーに買い物に行った私たちをも含めて勇気ある日本人、デイズニールランドで大きなミッキーマウスを抱えて歩いている日本人、サンフランシスコで客引きをする日本人、留学生、ハワイを日本人の街と言われるまでにした日本人、夏のバカンスに来ている人、民間外交を果たそうとし、はたまた、アメリカ人になろうと努力する。そんな日本人に、小さな小さな島国からやって来たコロボックル達に私は拍手を惜しみません。が、しかし、まだ日本がトヨタやホンダや東京やサクラや富士山に代表されているに過ぎないということも否定できません。

今、世界は大きな過渡期にさしかかっています。きな臭い話題が上っていますが、地球に住む人間一人一人が、ただ地球の平和を考えてさえおれば利害も生じずに、手を取り合えるのにとあって止みません。故に、私達は、国際人というよりもむしろ、地球人・にならねばいけないのではないかなと思うのですが、皆さんは如何でしょうか？

とにもかくにも一ヶ月に渡る私達のアメリカ珍道中は、日本人の恥と知識とユーモアを遺憾無く発揮しつつもまた、騒々しく幕を、閉じたのであります。たった一ヶ月位で、その国を知ることとは不可能ですが、結論として（というより、結論なんてものは存在しないのですが。）アメリカが良いとか日本が良いとかそんな事、決められようはずがありませんが、アメリカの良さも日本の良さも、他の諸外国の良さも、欠点も全て考慮した上で、第二の世界を造れる人間に、器の大きい人間に、私を含めて皆が、なれるのなら素晴らしい

と思います。

最後に、私の様な西洋かおれの方とはもとより、国粋主義だと言いつける人も、一度、広大で自由で、生きている愛すべき国、アメリカを訪れて自分を見つめ直しては如何ですか？きっと違うものが見つかるはずですよ。 GOOD LUCK、

## 短歌・俳句

三年七組 虚 無 為

白き露木をも人をもばやけさせた自分だけひとりいるよう

人生をあまりに深く悩みぬき苦しく生きちゃおもしろみなし

汝が顔を見たく近くを通れどもやはり今度も目をそらしたり

過激だとたとえ非難をされるとも言わねばならぬ時はあるもの

エジプトの指導者死して中東にキナ臭い雲たちのぼりそう

花火打ちや月は一時色なくし



## 編集長 上田達也 &amp; EDITORS

笹倉邦彦

極限状態で苦闘するのが、男なのだ。スプリングとは、まさに修羅場であった。

内村はるみ

昔話の桃太郎のごとく、りりしく鬼退治に向かって、結局鬼と仲良くなりました。22号に栄光あれ!! (座談会・自治会)

中瀬祐美

ココロノトビヲヲヒライテ カゼタイレテヤッテクダサイ。カラダガカルクナッテキテ、翔ベマス (座談会・自治会)

寺西章江

人生の遠足で道のりを楽しもう。きれいな木の葉が一枚みつかるとは、かもしれない。

喜田貴美枝

親愛なる者へ“ふり返れ歩きだせ悔やむだけでは変わらない、果てのない昨日より明日は少しましになれ” by みゆき (主張)

横井詠子

昔話のウサギのごとく、少し寝すごしたみたいなのが、やっと完成の兆しあり。22号に幸あれ!! (座談会・自治会)

西野玲子

ヤッター 名前が載るんだ!! これしかなかった。文才のない私の名をここに載せる方法は (平和への主張・僕らの主張)

藤倉 悟

朱に交われば赤くなる。が僕達には青くなる可能性がある。上野 見てるか?

木下真帆子

校内中 いやがる友を 追いつめて  
原稿強要 秋の夕暮 (体験記・クラス)

鳥淵浩伸

独創的な SPRING をめざしたのであるが、NORMAL なものしかできひんかった。  
(一言メッセージ・体験記・クラブ)

松浦正人

建設的なことは何もできなかったけれど、大変楽しく仕事をさせてもらいました。

尾崎博子

まずホッとして。できたんだな、しんどかった犠牲も多大、でも嬉しい! 一喜びもて勝利へ向かえージラーの言葉 (同上・ここ)

岡倉光悦

できた! そう思ったとたん、満足感、解放感、虚脱感が僕にのしかかってきた。  
(顔・文芸)

編集顧問

森 一雄 先生  
今西保雄 先生

若原久美

わぁ! しんどかったけど、やっと出来たゾ。これも16人の素敵な仲間たちのおかげです。  
(目次・文芸)

高澤信明

しんどかった! しんどかった! しんどかった! と言うほど力ぞえはできませんでしたが。  
(僕らの主張)

大城ゆかり お・わ・り!! (大手前いろいろ)



たくさんの応募ありがとうございました。紙面の都合上、応募の作品・イラストのすべてを掲載できなかったことをお詫びします。  
(上田達也)